

文部科学省科学研究費補助金
特定領域研究

セム系部族社会の形成

研究領域番号：124

第3回シンポジウム「平成17～18年度の研究成果」

領域代表者 大沼克彦
(国土舘大学イラク古代文化研究所教授)

平成19年7月

はしがき

本書は、文部科学省科学研究費補助金 平成 17 年度発足特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」の第 3 回シンポジウム「平成 17～18 年度の研究成果」の記録である。

このシンポジウムは 2007 年の 3 月 24 日(土)、25 日(日)の両日、東京の池袋サンシャインシティ・サンシャイン集会室（文化会館 7 階：708 号室）で開催された。

シンポジウムの広報内容は以下の通りである。

〈シンポジウム〉

文部科学省科学研究費補助金 平成 17 年度発足特定領域研究
「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
第 3 回シンポジウム「平成 17～18 年度の研究成果」

日時：2007 年 3 月 24 日（土）、25 日（日）

場所：池袋サンシャインシティ・サンシャイン集会室
（文化会館 7 階 708 号室）

主催：文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成」総括班

プログラム

第 1 日 3 月 24 日（土）各研究班の成果と課題

- | | |
|-------------|--|
| 9:30 | 開場 議事進行 西秋良宏 |
| 10:00-10:20 | 佐藤宏之「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」 |
| 10:20-10:40 | 西秋良宏「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」 |
| 10:40-11:00 | 藤井純夫「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」 |
| 11:00-11:10 | 休憩 |
| 11:10-11:30 | 常木 晃「西アジアにおける都市化過程の研究」 |
| 11:30-11:50 | 沼本宏俊「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」 |
| 11:50-12:10 | 本郷一美「西アジア先史時代から都市文明社会への生業基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」 |
| 12:10-13:10 | 昼食 |
| 13:10-13:30 | 月本昭男「パレスチナにおける都市の発達とセム系民族の文化的展開」 |
| 13:30-13:50 | 星野光雄「環境地質学、環境化学、14C 年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」 |
| 13:50-14:10 | 石田英實「ユーフラテス河中流域とその周辺地域の住民にみられる形質の時代的变化」 |
| 14:10-14:20 | 休憩 |
| 14:20-14:40 | 前川和也「「シュメール文字文明」の成立と展開」 |
| 14:40-15:00 | 岡田保良「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」 |
| 15:00-15:20 | 宮下佐江子「オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族の基層構造と再編」 |

15:20-15:30	休憩
15:30-15:50	松本 健「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究」
15:50-16:10	高濱 秀「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」
16:10-16:30	大沼克彦「総括班：総合的研究手法による西アジア考古学」
16:30-17:30	外部評価委員との意見交換 司会 大沼克彦
18:00～	懇親会（場所未定）

第2日 3月25日（日）講演、第1次現地調査の報告

9:30	開場 議事進行 前川和也
10:00-10:30	講演「Semitic “Urheimat”: A Linguistic Survey」池田 潤
10:30-11:00	講演「テル・タバンの遺跡出土古バビロニア時代文書」山田重郎
11:00-11:30	講演「テル・タバンの遺跡出土中期アッシリア文書と中期アッシリア時代におけるタバトゥ市」柴田大輔
11:30-12:00	討論
12:00-13:00	昼食
13:00-16:20	(休憩 14:30 - 14:50) 議事進行 西秋良宏 報告「第1次現地調査」大沼克彦、藤井純夫、宮下佐江子、沼本宏俊、常木 晃、長谷川敦章、木内智康、Lubna Omar、岡田保良、依田 泉、松本 健、星野光雄
16:20-16:30	休憩
16:30-17:30	総合討論 司会 大沼克彦

シンポジウムは、本研究領域の研究班各々の平成17～18年度の研究成果と解決すべき課題を明らかにし、多彩な研究分野の融合的連携を通して推進される領域全体の指針を示した。

シンポジウムの第1日は各研究班の成果と課題という内容で進行し、第2日は講演と第1次現地調査の報告という内容で進行した。本書に掲載されているのは第1日の発表内容である。

シリア現地調査がようやく発進した現在、本書を通して、研究班各々の意気込みを感じていただければ幸いである。

なお、第1日の3月24日には、総括班の外部評価者である國學院大學文学部の藤本強教授、岡山大学大学院社会文化科学研究科の稲田孝司教授、ドイツ・ミュンヘン大学中東考古学研究所のMichael Roaf教授の3先生の参集をたまわり、15にのぼる研究発表の終了後に、本研究領域全体の進展状況と推進方法に関する実直な評価と有益な助言をたまわった。この場を借りてお礼申し上げます。

平成19年7月24日
領域代表者 大沼克彦

目次

計画研究 西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係 佐藤宏之

1. 研究組織	1
2. 研究目的と方法	1
3. 2005-2006年度の研究経過と研究成果	1
4. 2007年度以降の計画	4
5. 「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するか	4
6. 研究成果の公表状況 2005-2006年度	4

計画研究 西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成 西秋良宏

1. 研究組織	7
2. 研究の目的	7
3. 研究の方法	7
4. 2005-2006年度の成果	7
5. 海外渡航などの主な活動	9
6. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか	9
7. 今年度以降の計画	9

計画研究 セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究 藤井純夫

1. 研究組織	13
2. 研究の目的	13
3. 研究の方法	13
4. 2005-2006年度の成果	13
5. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか	14
6. 2007年度以降の計画	14

計画研究 西アジアにおける都市化過程の研究 常木 晃

1. 研究組織	17
2. 研究の目的	17
3. 研究の方法	17
4. 2005-2006年度の成果	18
5. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか	18
6. 2007年度以降の計画	19
7. 2005-2006年度の業績 (本研究に関連するもの)	19

計画研究 北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究 沼本宏俊

研究組織	21
1. 研究目的	21

2. 研究方法	21
3. 2005, 2006 年度の成果	21
4. 研究成果の「セム系部族社会の形成」の研究への寄与	22
5. 2007 年度以降の計画	23

計画研究 西アジア先史時代から都市文明社会への生産基盤の変化に関する
動物・植物考古学的研究 本郷一美

1. 研究組織	25
2. 研究の目的	25
3. 研究の方法	25
4. 2005-2006 年度の調査と成果	25
5. 2007 年度の調査計画	26
6. 出版物	27
7. 口頭発表	28
8. 一般向け講演	28
9. 報道	28

計画研究 環境地質学、環境化学、¹⁴C 年代測定にもとづくユーフラテス河
中流域の環境変遷史 星野光雄

1. 研究の目的	29
2. 研究の方法	29
3. 2005-2006 年度の成果	29
4. 「セム系部族社会の形成」研究への寄与	30
5. 2007 年度以降の研究計画	31
6. 業績リスト	31

計画研究 ユーフラテス河中流域とその周辺地域の住民に見られる
形質の時代的变化 石田英實

1. 研究の目的	33
2. 研究の方法	33
3. 2005-2006 年度の成果	34
4. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか	35
5. 今後の研究	36

計画研究 「シュメール文字文明」の成立と展開 前川和也

I. 研究の目的	37
II. 研究の方法	38
III. 2005-2006 年度の成果	38
IV. 2007 年度以降の計画	43

計画研究 古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究 岡田保良

1. 研究組織	44
2. 研究の目的	44
3. 研究の方法	44
4. 2005-2006年度の成果	44
5. 海外渡航などの主な活動	45
6. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか	45
7. 今年度以降の計画	45
8. これまでの成果物	45

計画研究 オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族文化の
基層構造と再編 宮下佐江子

1. 研究組織	47
2. 研究の目的	47
3. 研究の方法	47
4. 2005-2006年度の成果	48
5. 「セム系部族社会の形成」研究への寄与	49
6. 2007年度以降の計画	50

計画研究 西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究 松本 健

I. 研究目的	51
II. 研究方法	51
III. 2005～2006年度の研究経過と研究成果	51
IV. Bishri 調査 (2007/03/07 - 2007/03/11)	51
V. 研究成果と問題点	58

公募研究 北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究 高濱 秀

.....	59
-------	----

総括班 総合的研究手法による西アジア考古学 大沼克彦

1. 研究組織	60
2. 研究の目的	60
3. 平成 17、18 年度の成果	60
4. 「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか	62
5. 今後の計画	62

計画研究 西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係

佐藤宏之 (東京大学大学院人文社会系研究科)

1. 研究組織

- 研究代表者 佐藤宏之・東京大学大学院人文社会系研究科・助教授
研究分担者 大沼克彦・国土舘大学イラク古代文化研究所・教授
橘 昌信・別府大学文学部・教授
安斎正人・東京大学大学院人文社会系研究科・助手
研究協力者 大貫静夫・東京大学大学院人文社会系研究科・教授
福田正宏・東京大学大学院人文社会系研究科・助手
山田しょう・明治大学校地内遺跡調査団・特別嘱託
金 正倍・東京大学文学部・外国人研究員
研究補助 森先一貴・東京大学大学院新領域創成科学研究科・博士課程

2. 研究目的と方法

後期旧石器時代初頭に世界規模で出現した現代人ホモ・サピエンスは、同後半期になると、氷期の不安定な気候変動等に影響された資源構造の変化に伴い、次第に各地の動植物資源に代表される地域生態に多面的かつ効率的に適合した地域社会・文化を形成しはじめる。この時、最初の部族社会の初源形態が誕生した可能性が高い。

現代人が誕生の地アフリカを脱して最初に拡散した西アジアの後期旧石器集団は、遊動型狩猟採集民であり、西アジアという気候環境に適応した狩猟採集戦略の中に、いち早く植物質資源の管理・半栽培と動物資源の馴化技術を組み入れた。長期にわたる試行錯誤の過程を経ながらこれらの生業戦略は、晩氷期の気候変動への本格的な対処戦略として採用され、完新世以降の安定化した温暖な気候環境のもとで、農耕・牧畜を主体とした定住的生業 = 社会システムに本格的に移行したと考えられている。

従って、西アジアにおける部族社会の形成プロセスの初期段階を探る試みは、少なくとも後期旧石器時代に遡及した、人類の行動進化と定住化プロセスの進行過程の中に求める必要がある。

上記した一般的なシナリオは、十分な検証を受けたとは言い難い。そこで、本研究では、近年東アジア・北東アジア・北米等の世界の他地域で組み立てられつつある稲作農耕や階層化狩猟採集民社会等の定住化過程論、および後期旧石器時代における地域社会形成論との比較考古学的・比較民族考古学的検討を行い、西アジア定住化仮説の理論的妥当性について検討することを第一の目的とする。併せて、本研究領域の共通調査フィールドであるシリア・ビシュリ山系一帯において、具体的な地域相に関する検討も行いたい。

3. 2005-2006 年度の研究経過と研究成果

3.1 資料収集

西アジアおよび世界各地の行動進化と定住化過程論に関する文献資料等の収集とデータ集成。

3.2 データベースの作成

イラク国立考古学博物館およびシリア国立博物館の考古資料(前期旧石器時代～パルティア期)の写真画像 245 点(研究分担者安斎撮影、1978～79年)の画像データベース化。破壊されたイラク国立考古学博

物館所蔵資料画像のうち主要なものは、特定領域科研のホームページ上にて公開。

URL: <http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryuiki/index.html>

3.3 会議・シンポジウム・講演会等

定期的に班会議を開催し、領域の総括会議・シンポジウムに参加した。

また2006年10月28日(土)、西アジアにおける農耕過程研究の第一人者であるスティーブン・マイズン教授(英国レディング大学・人間環境科学部長)の公開講演会を、東京大学本郷キャンパスにて実施した。

演題は「The Origin of the Neolithic and Farming in the Jordan Valley」

講演の梗概は、領域のホームページに公開している。

3.4 海外資料調査

(1) ヤクーツク 2006年2月10日～20日

ヤクーツクは、北シベリアにあり、過去および現在も酷寒の地として知られている。当地域は、現代人が出現する後期旧石器時代になって初めて人類が本格的に進出可能となり、新石器時代には土器使用の移動民文化という特異な適応様式が出現するが、その様相を、北方寒冷気候に対する人類の行動進化と定住戦略の多様性という視点から、具体的に把握することを目的とした。主にサハ共和国科学アカデミー(旧石器時代・新石器時代等)とサハ国立大学考古学博物館所蔵資料の検討を中心とした。代表的な資料としては、ジュクタイ洞窟遺跡、ウスチ・ジュクタイ遺跡、エジャンチ遺跡、ディリング・ユリヤフ遺跡、モンハラマ遺跡、スウムナギン・ベリカチ・スイヤラフの各新石器文化の遺跡出土資料を検討した。

(2) アメリカ合衆国 2006年3月11日～22日

西アジア旧石器時代の調査は、伝統的に欧米が中心となって実施しており、その主要な資料は欧米の各研究機関に保管されている。2005年度は、アメリカ合衆国のハーバード大学ピーボディ博物館とシカゴ大学東洋学研究所およびイリノイ大学シカゴ校に保管されている同資料の現地調査を行った。ハーバード大学では主にレバント地方の主要標識遺跡であるクサル・アキル岩隠遺跡、タブーン洞窟遺跡、エル・ワド洞窟遺跡、スフル洞窟遺跡、ケバラ洞窟遺跡等、イリノイ大学シカゴ校では主にジャルモ遺跡等、シカゴ大学東洋学研究所では主にアブ・ノシュラ遺跡等出土資料について、実見および意見交換を行った。

(3) 韓国 2006年6月4日～10日

韓国における後期旧石器時代の資料調査と現地見学を実施した。韓国における旧石器時代の調査は、ここ数年飛躍的に増加しており、それに伴い、資料の蓄積も著しい。特にこれまで不明瞭であった更新世/完新世移行期の関する調査も行われるようになり、その結果、日本列島とは異なる移行の様相が存在した可能性が高くなっている。

例えば、最古の土器は、列島とロシア極東のアムール中流域では13000BP前後から知られているが、韓国ではこれまでのところ、10000BPを遡り得るような年代の土器は知られていない。これには、その直前段階である細石刃石器群の存続年代の差異が原因している可能性が指摘できる。韓国では、細石刃石器群は、2万年前以前にすでに出現しており、更新世末までそのまま存続している可能性が高いが、日本列島では、同様の傾向を有する北海道を除くと、15000BP以降の短期間に出現し消滅する。さらに、土器出現期の石器群は、すでに尖頭器主体の石器群に移行しているが、韓国では尖頭器主体の石器群は未見である。

北海道は更新世の期間大陸と陸続きで、いわば大陸から張り出す「半島」状の地形環境であったため、北海道と韓国では大陸文化の一部として旧石器文化が位置付くが、一方列島は、現九州・四国・本州が一体化した「古本州島」を形成していたため、異なる文化変動が認められる。このように、定住化の過程は、よりミクロなレベルの文化的・自然環境的差異を前提にした議論が必要である。

韓国では、朝鮮大学校・釜山大学校・湖南文化財研究院・忠北大学校・石荘里博物館・清州国立博物館・

国立中央博物館等で資料調査を行った。

その結果韓国の後期旧石器文化は、対岸の九州を含む「古本州島」とは構造的な異なりを有し、剥片尖頭器を主要器種とする石刃石器群が長期にわたり継続し、その後半段階（おそらく後期旧石器時代後半期）に北方から細石刃石器群が流入して、これらの石刃石器群と併存・融合するものと思われる。韓国に見られる細石刃石器群は、列島とは対照的に異なり、大陸の細石刃石器群の特徴とよく共通する。特に船底形石器を共伴することが特徴であるが、これは九州に伝播して角錐状石器（三稜尖頭器）に変移することが理解された。列島の後期旧石器時代後半期に突然出現する角錐状石器の起源については、これまで漠然と中国大陸起源と想定されていたが、そうではないことが確認された。九州に出現した角錐状石器は、その後列島の東に分布を広げ東北地方までに及ぶが、「古本州島」の範囲に含まれない北海道には波及することがなかった。

一方北海道（「古北海道半島」）では、陸接していた大陸・サハリン経由で船底形石器が流入しているが、この時期はいまのところ、細石刃石器群後期末（更新世末～完新世初頭）と考えられている。従って、同じ技術系統を有する石器が、異なる時期に列島の東西（南北）に伝播していたことになる。

環日本海地域における定住化のプロセスは、船底形石器という一つの石器を取り上げてみても、きわめて複雑である。従って、十分な資料に基づき、慎重な分析を今後も加えていく必要がある。

(4) 中国東北部 2006年7月9日～16日

中国・吉林省にある吉林大学を訪問し、最近調査成果が著しい吉林大学边疆考古研究中心にて、資料調査と現地見学を実施した。主要な検討資料は、金斯太洞窟（内蒙古）・寿山仙人洞・和龍石刃溝・和龍柳洞遺跡等で、黒曜石原産地として著名な長白山の現地見学も行った。

黒曜石は、後期旧石器時代の日本列島でもっとも著名な石器石材であるが、火山ガラスであるため、その産出地は、世界的に見た場合大陸プレート境界付近の火山地帯に限られる。列島周辺では、環日本海地域とカムチャッカにほぼ限られる。近年の黒曜石の元素組成分析の進展により、これら各産地の黒曜石は原産地をほぼ同定することができるようになったので、遺跡出土の黒曜石資料がどの原産地の石材を利用しているかが判明するようになり、その結果旧石器時代における「モノ」の移動、そして人の移動もある程度推定可能となった。

環日本海地域では、ロシア沿海州南部のウスリースク周辺・ハサン地区とアムール中流域に小規模な黒曜石原産地が発見されているが、列島の白滝・置戸（北海道）・和田峠（長野）・腰岳（北部九州）といった大規模産地に匹敵する規模の原産地は、北朝鮮と中国東北部の境界にある長白山が唯一の例となる。従って、長白山黒曜石を利用した遺跡の研究は、きわめて重要な意義をもつ。

今回の調査では、黒曜石石器群を主体に資料調査を行った。その結果、長白山に近い吉林省東南部を中心に、長白山黒曜石にほぼ依存する石刃・細石刃石器群等の黒曜石石器群の存在が確認された。特に、北海道・置戸原産地周辺の遺跡とほぼ同じ内容を示す大型石刃石器群が存在することを確認したことは重要な成果であった。おそらくこの時期は、後期旧石器時代末葉期に属すると推定され、同時に確認された黒曜石製細石刃石器群の存在は、この地域における定住化プロセスを推定する基幹的な資料になると考えられる。

(5) ロシア沿海州 2007年3月1日～4日

ウラジオストクにある国立極東大学を訪問し、同大博物館に所蔵されている後期旧石器時代～新石器時代にかけての資料調査を行った。特に、同博物館が近年重点的に調査している北朝鮮との国境に近いハサン地域の黒曜石石器群は興味深く、従来列島では北海道内でしか確認されていなかった細石刃石器群に近い内容の資料が存在している。一方ハンカ湖周辺遺跡群やアムール流域の細石刃石器群は、内蒙古・ザバイカル等の大陸内部の細石刃石器群と高い共通性が認められ、沿海州中央部のシホテ・アリニ山地より西側は、環日本海地域とは別の地域性を示す可能性が高い。このことは、環日本海地域における更新世～完新世移行期

(すなわち定住化過程)の様相を解明する重要な視点を与えるものとなる。

4. 2007年度以降の計画

4.1 資料収集

引き続き、西アジアおよび世界各地の行動進化と定住化過程論に関する文献資料等の収集とデータ集成を継続する。

4.2 現地調査

昨年度末に実施されたシリア・ビシュリ山系の特定領域総合踏査によって確定された調査候補遺跡の本格調査に参加する。

4.3 海外資料調査

引き続き、行動進化と定住化過程に関する資料調査を海外で実施する。2007年度は、ヨーロッパ・西アジア地域を対象としたい。

4.4 会議・集会

領域の全体会議にあわせて、研究打ち合わせ会議および中間報告会・研究集会を実施する。また領域が開催する公開シンポジウム等で、成果報告を行う。

5. 「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するか

近年の旧石器考古学を中心とする先史考古学研究では、現代人の出現と共に現代人型の行動が開始されたと考えられている。技術的側面においては、より均整がとれ標準化・規格化された石刃技法への転換、標準化された石器形態とその多様化・複雑化、骨角器使用等が認められ、同時に個人的装飾品や芸術作品も登場する。このような革新的な変化の出現プロセスは、漸進的とする説と爆発的とする説があるが、いずれにせよ、高度な認知能力の獲得と関係することはまちがいないだろう。その結果、組織的な動物狩猟、人口の急速な増大、地域集団の形成と社会・経済組織の複雑化がもたらされた。

一方近年の気候科学の発達により、旧石器時代(更新世)の気候環境がきわめて不安定であり、完新世の安定化した気候環境と対照的であったことが知られている。このことは、人類の資源環境の安定度にもきわめて強い影響を与えたことが予想され、温帯地域を中心とする後期旧石器時代人は、移動資源である中・大型獣を対象とした広域移動型狩猟戦略を重視したのであろう。ところが一転して完新世になると、気候の温暖化・安定化により資源構造が安定化し、資源開発の予測可能性が飛躍的に向上した。こうなると、一定地域内の計画的な多角的資源開発の方が有利となり、定住化が促進される基幹的背景を生み出した。

従って、後期旧石器時代を通じて部族社会のような複雑な社会構造の初源形態が出現し発達したが、それが本格化するためには、完新世の気候環境条件が必要であったと考えられる。気候環境の向上は斉一的であったとしても、資源環境は各地で固有であった可能性が高く、さらにその利用戦略は、地域や集団個々の歴史的経路に依存した個性的な戦略伝統に基づいて発揮されていたことであろう。「セム系部族社会」は明らかに地域社会の一形態に包摂されると考えられることから、部族社会そのものの普遍的な性格と地域的かつ特殊な性格の両者の形成プロセスを探るためには、研究対象地以外の比較対象を広く世界に求めるべきであろう。個々の部族社会は、その最初の段階から個性的性格を内包していた可能性が高いと思われる。

6. 研究成果の公表状況 2005-2006年度

6.1 直接的な成果

[著書・論文等]

- 安齋正人 2006 『『神子柴文化』の新解釈—学史的再検討—』『考古学』IV集、1-16頁
- 安齋正人 2006 「序言 構造変動の探求を目標とする編年構築」『旧石器時代の地域編年的研究』1-3頁、同成社
- 安齋正人 2006 「『縄紋式』階層化社会の一事例—生業分化モデルの検証—」『生業の考古学』(藤本強編)56-72頁、同成社
- 安齋正人・佐藤宏之編 2006 『旧石器時代の地域編年的研究』同成社、372p.
- 佐藤宏之 2005 「総論—食糧獲得社会の考古学—」佐藤宏之編『食糧獲得社会の考古学』1-32頁、朝倉書店
- 佐藤宏之 2005 「ヒトはどのような場所に住んできたか—環境適応の二つの形—」松永澄夫編『環境—安全という価値は・・・』41-68頁、東信堂
- 佐藤宏之 2005 「北海道旧石器文化を俯瞰する—北海道とその周辺—」『北海道旧石器研究』10号、137-146頁
- 佐藤宏之 2005 「日本列島の自然史と人間」『日本の地誌 第1巻 日本総論I(自然編)』80-94頁、朝倉書店
- 佐藤宏之 2006 「環状集落の社会生態学」『旧石器研究』2号、47-54頁、日本旧石器学会
- 佐藤宏之 2006 「遺跡立地から見た日本列島の中期/後期旧石器時代の生業の変化」『生業の考古学』(藤本強編)16-26頁、同成社
- 佐藤宏之 2006 「気候科学の発達に見る気候大変動と人類史、ジョン・D・コックス著『異常気象の正体』」『季刊東北学』9号、219-221頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 佐藤宏之 2006 「北アジアの旧石器文化—ヤクーツクの資料調査—」『News Letter』4号、1-6頁
- Sato,H. 2006 Socio-ecological research of the circular settlements in Japanese Upper Paleolithic. *Seonso wa Kodae*, 25: 267-281, Korean Association for Ancient Studies.
- 佐藤宏之 印刷中 「1万3000年前に海を渡った人びとを追う—最初のアメリカ人をめぐって—」『科学』岩波書店
- 橘 昌信 2005 「九州島における後期旧石器時代成立期の地域性」『考古論集』川越哲志先生退官記念論文集、1-16頁、川越哲志先生退官記念事業会
- 橘 昌信 2006 「国際黒曜石サミット—石器石材としての黒曜石の利用—」『黒曜石文化研究』4号、3-12頁
- 橘 昌信 2006 「縄文時代早期の大集落と前期旧石器論争—早水台遺跡—」『図説宇佐・国東・速見の歴史』18-19頁、郷土出版社
- 橘 昌信 2006 「先史時代のブランド石材の流通—黒曜石の島 姫島」『図説 宇佐・国東・速見の歴史』20-21頁、郷土出版社
- 橘 昌信 印刷中 「大野川の谷と台地の生活—旧石器時代—」『大分県竹田市史』竹田市
- 橘 昌信編 印刷中 『池の岡遺跡』宇和島市教育委員会
[学会発表等]
- 大沼克彦 2006.7 "Lithic Artifacts unearthed from the Site of Haji Bahrami Cave, Fars Province, South Iran." 欧米考古学会 C-15 分科会(「イランの旧石器」)[ポルトガル・リスボン大学]にて研究発表
- 佐藤宏之 2005.4 「前期旧石器存否問題と研究の現状」朝日カルチャーセンター・東京 公開講座『21世紀 日本考古学の課題』
- 佐藤宏之 2005.4 「遺跡立地とは何か—機能・景観・geoarchaeology—」北海道考古学会 2005 年度研究

大会基調講演

- 佐藤宏之 2005.6 「日本列島の現代人の起源—捏造事件以後の旧石器研究の現状—」文京ふるさと歴史館
平成 17 年度歴史講座
- 佐藤宏之 2005.6 「環状集落をめぐる地域行動論—環状集落の社会生態学—」日本旧石器学会第 3 回シン
ポジウム『環状集落—その機能と展開をめぐる—』
- Sato, H. 2005.8 “A Perspective on the Middle Paleolithic study of the East Asia.” In *Major Issues of the
Eurasian Paleolithic, Proceedings of the International Symposium “Early Habitation of Central, North
and East Asia: Archaeological and Paleoecological Aspects”*, pp. 161-171, Institute of Archaeology and
Ethnology Press: Novosibirsk.
- 佐藤宏之 2006.6 「日本列島の現代人の起源—捏造事件以後の旧石器研究の現状—」韓国・朝鮮大学校人
文科学研究所講演会にて招待講演
- 佐藤宏之 2006.7 「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」総括班シンポジウム [於池
袋サンシャインシティ・サンシャイン集会室] にて研究発表
- 佐藤宏之 2006.7 “Socio-ecological research of the circular settlements in Japanese early Upper Paleolithic.”
International Symposium of Archaeology in Jilin University, 2006 “Paleolithic Archaeology in East Asia” [中
国、吉林大学] にて研究発表
- 佐藤宏之 2006.9 「時空の再現—「人間らしさ」の起源をめぐる—」東京大学総合研究博物館公開講座
にて講演
- 佐藤宏之 2006.12 「環日本海北部地域における後期更新世の環境変動と人間の相互作用に関する総合的研
究」総合地球環境学研究所プロジェクト研究『日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化
的検討』全体研究集会にて研究発表
- 佐藤宏之 2007.2 「聖地巡礼—ジユクタイ洞窟とディリング・ユリャフー」第 8 回北アジア調査研究報告
会にて研究発表
- 橘 昌信 2006.7 “The early upper Paleolithic features in Kyushu island, Japan.” International Symposium
of Archaeology in Jilin University, 2006 “Paleolithic Archaeology in East Asia” [中国、吉林大学] にて
研究発表
- ## 6.2 関連する成果
- [著書・論文等]
- 安斎正人編 2006 『現代考古学事典—縮刷版—』同成社
- 菊池徹夫・熊林佑允・佐藤宏之・高橋龍三郎 2005 「北米北西海岸クイーン・シャーロット諸島における
民族考古学的研究」『史観』153 冊、97-120 頁
- 佐藤宏之 2006 「伝統的パラダイムを越えたアイヌ文化の提示、瀬川拓郎著『アイヌ・エコシステムの考
古学』『季刊東北学』8 号、266-269 頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 佐藤宏之 2007 年 「民族考古学から見た東アジアの狩猟文化」『東北学』10 号、86-101 頁、東北芸術工
科大学東北文化研究センター
- [学会発表等]
- 佐藤宏之 2006.9 「民族考古学から見た東北アジアの狩猟採集文化と縄文文化」國學院大學 21COE 国際シ
ンポジウム『東アジア世界における日本基層文化の考古学的解明』におけるセッション『縄文文化と
その隣人』にて研究発表

計画研究 西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成

西秋良宏（東京大学総合研究博物館）

1. 研究組織

研究代表者 西秋良宏・東京大学総合研究博物館・教授

研究協力者 Marc Verhoeven・東京大学総合研究博物館・客員助教授（当時）

須藤寛史・岡山オリエント美術館・学芸員

下釜和也・東京大学大学院人文社会系研究科・博士課程

木内智康・東京大学大学院人文社会系研究科・博士課程

久米正吾・早稲田大学大学院文学研究科・博士課程

海外共同研究者 Marjan Mashkour フランス自然史博物館・研究員

Marie Le Miere フランス地中海東部研究所・研究員

Lionnel Gourichon フランス研究担当省・ポスドク研究員

2. 研究の目的

本特定領域研究が焦点をあてるビシュリ山系はシリア砂漠の北端に位置する。年間降雨量は 200mm 足らずであって、天水農耕を営みうる地域にない。こうした乾燥地への食料生産民の進出プロセスを多面的に明らかにし、その後、当地に展開したビシュリ集団が形成された素地を探るのが本研究班の目的である。新石器時代およびその前後の時代が研究対象となる。食料生産経済の発生過程そのものを調べると言うよりは、その乾燥地への波及過程を調べる点に主眼があり、二次的新石器化過程の研究と位置づけられる。

3. 研究の方法

第一は (1) ビシュリ山系そのものの現地調査により生データを入手し、それを解析することである。現地調査は 2007 年度末に実施された。調査が実現するまで、二つの方法で研究をすすめた。一つはビシュリ関連地域の既存データの再分析、もう一つは西アジア他地域にもひろがる乾燥地での状況を検討し前者の結果を比較検討するためのモデル構築研究である。

ビシュリ関連地域としては (2) ビシュリ山系西側に位置するパルミラ盆地、比較地域としては、(3) シリア砂漠外縁部にあたるハブール平原および (4) イラン南西部の乾燥平原、マルヴ・ダシュト平原を扱った。いずれも本領域代表者が野外調査を経験・企画したか、もしくは収集標本が実地に利用しうる地域である。したがって、オリジナルなデータを解析することができる。

4. 2005-2006 年度の成果

2006 年 6 月までに得られた成果については、『第 2 回シンポジウム発表要旨』（2006）に記した。その後の主な進展についてのみ、述べる。

(1) ビシュリ山系の遺跡分布踏査

2007 年の 2 月から 3 月にかけて総括班が実施した踏査に、本領域研究協力者の木内智康が参加し、データ収集にあたった。現在、そのデータ解析の途上である。

(2) シリア砂漠新石器遺跡の集成と検討

1967年から1984年にかけて東京大学が調査したパルミラ地域の旧石器～新石器時代遺跡につき、データベースを作成した。約80の遺跡がある。東京大学総合研究博物館収蔵標本の再鑑定結果にもとづき時期別変遷を検討した。その結果、先土器新石器時代末期に遺跡数が急増すること、それは牧民の本格的展開と機を一にするのではいかという点が確認できた。また、エルコウム盆地で蓄積されたフランス隊のデータ集成も実施し、それとパルミラ盆地での成果を照らし合わせることによって、ビシュリ山系での遺跡出現パターンについて見通しを得ることができた。

(3) シリア砂漠外縁部での遺跡研究

これまでに引き続き、シリア東北部ハブール平原にあるテル・セクル・アル・アヘイマル遺跡を対象として、当地への新石器文化波及プロセスについて調べた。2007年度は8月から9月にかけて1ヶ月ほどのフィールドワークをおこなった。同時に生業経済を調べるための動植物遺存体の分析を実施した。

当遺跡はハブール平原最古の農耕村落遺跡と目されている。したがって、当地への食料生産民進出過程を調べるには格好の遺跡である。主な成果の一つは、最下層、すなわち後期PPNBの集団の生業について一定の見通しが得られたことである。特に、家畜ヒツジ・ヤギがでそろっていることが確認できた。ここでも最初の進出と牧畜技術が関連していたことが示唆される。

(4) ザグロス山中高原遺跡群の研究

イラン南西部の都市シーラーズ近郊にあるマルヴダシュト平原において1956年から65年にかけて東京大学が調査した新石器遺跡を対象として、当地への新石器経済波及プロセスについて再検討を続けた。既に、昨年までの再分析によって、ムシュキ期からジャリ期にかけて生業の転換があったこと、すなわちジャリ期に本格的な農耕牧畜村落が形成されたことがわかっていた。その後の研究で、以下の進展があった。

第一は当地最古の土器新石器遺跡とされるムシュキ遺跡につき新たに8つの放射性炭素年代を得て、その居住時期が8200-8300年前頃であったことを確定させたことである。同時に、東京大学総合研究博物館収蔵の動物骨分析が進展し、この時期には家畜種が少なく野生動物狩猟がさかんであったことも確定した。この点は、この時期まで家畜飼育が一般化していなかったことを示すとも考えられるが、一方で、一時的な出来事であった可能性も示唆された。すなわち、ムシュキ期遺跡は8.2kaイベントとよばれる気候悪化期に一致しており、狩猟への先祖帰りが一時的に起こっていたのではないかの予察が得られた。

第二は、当地に食料生産経済が波及した場合の故地の一つと考えられるザグロス山系西部の遺跡につき、再検討したことである。近年の動物考古学の進展によって、ザグロス西部地方では約1万年前には既にヤギの飼育がおこなわれていたことが喧伝されている。その研究の中心となっているのはガンジダレ遺跡である。この遺跡の石器群をイラン、テヘラン博物館で研究することができた。その結果、いわゆるザグロス新石器インダストリーの典型例であって、ほとんど層位的な変化がないことが確認できた。かつてこの遺跡には1500年ほどの居住期間が見込まれていたが、近年の放射性炭素年代再測定により100年ほどの短期遺跡であったとの説がだされている。石器研究の成果はそのことを裏付ける証拠となりうる。また、ムシュキ期石器群との比較研究により、両者が一系であろうとの認識もえられた。

(5) その他

2006年もシリア北西部レヴァント地方山岳地帯にあるデデリエ洞窟の発掘調査に参加し、ナトゥーフ文化期の集落の研究にあたった。年代測定の結果、この集落はナトゥーフ期後期の乾燥期、すなわちヤン

ガードリアス開始期頃の遺跡であることが確定し、この乾燥化が原初期の食料生産経済民の生業に与えた影響についての考察が可能になった。この研究は、食料生産経済確立後の集団が乾燥地環境にいかに対応したかを考察する際、対照所見を提供する。

5. 海外渡航などの主な活動

- (1) シリア、デデリエ遺跡の現地研究。2005年8月4日～8月27日（渡航は別資金による）。(西秋+須藤)
- (2) シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の現地研究。2005年9月8日～10月9日。(西秋+Verhoeven+須藤+木内+下釜+久米+Le Miere+Lionnel)
- (3) イラン、マルヴダシュト平原の遺跡踏査。2005年10月10日～10月17日。(西秋+Verhoeven)
- (4) 東京大学でシンポジウム『Marv Dasht Revisited: The Neolithic Archaeology of Southwest Iran』を開催。2005年12月20日（海外研究者来日は別資金による）。(西秋+Verhoeven+Mashkour)
- (5) フランス、ルーブル美術館、先史学研究所等で収蔵標本調査。2006年3月21日～3月29日（渡航は別資金による）。(西秋+木内+Mashkour)
- (6) スペイン、マドリッド大学で世界西アジア考古学会議に出席・発表。2006年4月2日～7日。(西秋)
- (7) シリア、ダマスкас古物局での研究打ち合わせならびにダマスкас大学で講演。2006年4月10日～4月14日。(西秋)
- (8) シリア、デデリエ遺跡の現地研究。2006年7月31日～8月13日。(西秋)
- (9) シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の現地研究。2006年8月14日～9月25日。(西秋+須藤+木内+下釜+久米+Le Miere+Lionnel)
- (10) シリア、国立考古学博物館にて研究打ち合わせ。2006年11月1日～11月7日。(西秋)
- (11) イラン、国立考古学博物館にて収蔵標本の研究。2006年12月18日～12月28日。(西秋)
- (12) フランス、国立自然史博物館、リヨン大学等で収蔵標本調査。2007年2月18日～2月24日（渡航は別資金による）。(西秋+久米+Mashkour)
- (13) シリア、ビシュリ山系踏査に参加。2007年2月18日～3月11日。(木内)

6. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか

上記3成果のところでも述べた研究(1)(2)はシリア砂漠の居住史再構築という地域研究である。紀元前3千年紀にはシリア砂漠に展開していたとされている「セム系」集団の形成過程およびその前史、すなわち彼らの由来や生計、集団構造の原型を語るのに寄与する。一方、(3)(4)は完新世前半における人類の乾燥地進出経緯の解明という一般研究に相当する。それらは、乾燥地集団に共通する適応戦略という観点から一般化して理解するための素地を提供する。

7. 今年度以降の計画

ここで述べた取り組みを継続するが、ビシュリ山系での野外調査が可能になったため、研究の重点をビシュリそのものにおくようにする。同時に、成果を統合し、当該課題につきモデルが提出できるようつとめる。

直接関係する成果

【出版物】

Nishiaki, Y. (in press) "Patterns in exploitation and use of flint at the Neolithic settlement of Tell Seker al-Aheimar, northeast Syria". In: *Geology and Archaeology of Siliceous Rocks in the Near East: Availability,*

Characterization and Prehistoric Exploitation, edited by C. Delage. Oxford: Archaeopress.

Nishiaki, Y. and M. Le Mière (in press) "Stratigraphic contexts of the early Pottery Neolithic at Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Northeast Syria". Proceedings of the 4th International Congress of the Archaeology of the Ancient Near East, edited by H. Kuehne. Berlin.

Nishiaki, Y. (in press) "Preliminary notes on the PPN and PN lithics from Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Syria" In: *Proceedings of the 4th International Workshop on PPN Chipped Stone Industries*, edited by N. Balkan and D. Binder. Istanbul.

西秋良宏 (2007) 「シリア砂漠北端、パルミラ盆地の先史遺跡」『セム系部族社会の研究 Newsletter』4: 7-11。

西秋良宏 (2007) 「北メソポタミア初期農耕村落の起源 - シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡第6次発掘調査」『古代オリエント世界を掘る - 第14回西アジア発掘調査報告会』: 30-35。

西秋良宏 (2007) 「縄文時代開始期と同じ頃の西アジア - 旧石器時代から新石器時代への移行」『第58回歴博フォーラム: 縄文時代の始まり (予稿集)』: 8-11。

Hayakawa, Y., S., Oguchi, T., Komatsubara, J., Ito, K., Hori, K. and Y. Nishiaki (2007) "Rapid on-site topographic mapping with a handheld laser range finder for a geoarchaeological survey in Syria." *Geographical Research* 45: 95-104.

Nishiaki, Y. and M. Mashkour (2006) "The stratigraphy of the Neolithic site of Jari B, Marv Dasht, southwest Iran". *Orient Express - Notes et Nouvelles d'Archéologie Orientale* 2006(3): 77-81.

西秋良宏 (2006) 「ムシュキとジャリ - イラン南西部、マルヴダシュト平原の新石器化に関する諸問題」『生業の考古学』藤本強編: 292-305、同成社。

西秋良宏 (2006) 「イラン南西部、マルヴダシュト平原の新石器化過程と 8.2k イベント」『日本オリエント学会第48回大会研究発表要旨集』: 40。

西秋良宏 (2006) 「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成 (2005年度研究報告)」『セム系部族社会の研究』大沼克彦編: 32-36、2005年度文部科学省科学補助金特定領域研究総括班研究報告書。

西秋良宏 (2006) 「北メソポタミア農耕村落の起源 - テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の第5次調査 (2005年)」『考古学が語る古代オリエント』: 22-28、日本西アジア考古学会。

須藤寛史・西秋良宏 (2006) 「シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の動物骨埋納」『第11回日本西アジア考古学会大会発表要旨』: 17-22、大正大学。

早川裕一・小口 高・小松原純子・伊藤香織・西秋良宏 (2006) 「シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡における簡易レーザー距離計を用いた地形調査」『地形』26(3): 286。

小口 高・堀 和明・綿貫拓野・小松原純子・小口千明・早川裕一・西秋良宏 (2006) 「北東シリア、ハブール川沿いの段丘と堆積物 (第2報)」『地形』27(1): 107。

Nishiaki, Y. and M. Le Mière (2005) "The oldest Pottery Neolithic of Upper Mesopotamia: New evidence from Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Northeast Syria". *Paleorient* 31(2): 55-68.

西秋良宏 (2005) 「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」『セム系部族社会の研究 Newsletter』1: 5。

【口頭発表】

西秋良宏 (2007) 「縄文時代開始期と同じ頃の西アジア - 旧石器時代から新石器時代への移行」『第58回歴博フォーラム: 縄文時代の始まり』国立歴史民俗博物館、2007年1月20日。

- 西秋良宏 (2007) 「北メソポタミア初期農耕村落の起源 - シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡第 7 次発掘調査」『古代オリエント世界を掘る - 第 14 回西アジア発掘調査報告会』日本西アジア考古学会。古代オリエント博物館、2007 年 3 月 3-4 日。
- Nishiaki, Y. (2006) “The Jazireh Neolithic: New perspectives from Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur”. *Public Lecture*, Damascus University, April 11, 2006.
- Mashkour M., A. Mohaseb, J.-D. Vigne and Y. Nishiaki (2006) “The Neolithic settlement in the Marvdasht Plain – South west Iran.” Paper presented at the Conference on *Archaeozoology of Southwest Asia and Adjacent Areas*, June 28-July 1, 2006.
- 須藤寛史・西秋良宏 (2006) 「シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の動物骨埋納」『日本西アジア考古学会第 11 回大会』大正大学、2006 年 6 月 17-18 日。
- 西秋良宏 (2006) 「イラン南西部、マルヴ・ダシュト平原の新石器化と 8.2k イベント」『日本オリエント学会第 48 回大会研究発表』早稲田大学文学部、2006 年 10 月 29-30 日。
- 西秋良宏 (2006) 「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成 (現状と課題)」『第 2 回セム系部族社会の研究シンポジウム』文部科学省科学補助金特定領域研究総括班、古代オリエント博物館、2006 年 7 月 1-2 日。
- 西秋良宏 (2006) 「北メソポタミア初期農耕村落の起源 - シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡第 6 次発掘調査」『古代オリエント世界を掘る - 第 13 回西アジア発掘調査報告会』日本西アジア考古学会。古代オリエント博物館、2006 年 3 月 11-12 日。
- Nishiaki, Y. (2005) “Jari B and Mushki: Problems on the Neolithic chronology of the Marv Dasht plain.” Paper presented at *the Chorus Seminar on Marv Dasht Revisited: The Neolithic Archaeology Southwest Iran*. The University Museum, the University of Tokyo, December 20, 2005.
- Nishiaki, Y. (2005) “New insights from the Neolithic sequence of Tell Seker al-Aheimar”. Paper presented at *the International Symposium on The Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond*. The University Museum, the University of Tokyo, July 8-9, 2005.
- Nishiaki, Y. (2005) “PPNB lithic technology and raw material procurement strategies at Tell Seker al-Aheimar”. Paper presented at *the International Symposium on The Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond*. The University Museum, the University of Tokyo, July 8-9, 2005.

関係する成果

【出版物】

- Nishiaki, Y. (in press) “The Chalcolithic flaked stone artifacts from Tell Beydar III, the Upper Khabur, Syria”. *Subartu*.
- Nishiaki, Y. (in press) “The Late Halafian lithic industry of Tell Kashkashok I, Upper Khabur, Syria”. *Tell Kashkashok I*, edited by A. Suleiman and M. Arimura, Berlin.
- 西秋良宏 (印刷中) 「ナトーフ文化」など計 61 項目 『増補改訂版・旧石器考古学辞典』旧石器文化談話会編、学生社。
- 西秋良宏 (2006) 「足跡遺構のデジタル修復と三次元解析にもとづく西アジア新石器時代の履き物研究」『財団法人福武学術文化振興財団平成 17 年度歴史学・地理学助成報告書』: 56-61、財団法人福武学術文化振興財団。
- 西秋良宏 (2006) 「北メソポタミア初期農耕文化の起源と展開に関する考古学的研究」『三菱財団第 36 回

事業報告書』：376-378。

西秋良宏・仲田大人・青木美千子・須藤寛史・近藤修・米田穰・赤澤威（2006）「シリア、デデリエ洞窟における 2005 年度発掘調査」『高知工科大学紀要』3：135-153。

西秋良宏・三國博子・小川やよい・有松 唯（2006）『考古美術（西アジア）部門所蔵考古学資料目録：第 7 部イラン、デーラマン古墓の土器』東京大学総合研究博物館。

西秋良宏（2006）「日本語序文」『Catalogue of Archaeological Specimens in the Department of Archaeology of Western Asia, Part 8: Selected Photographs of Archaeological Sites in Iraq』, by Marc Vervoeven, The University Museum, the University of Tokyo, Material Reports 64。

西秋良宏（2006）「湖に沈む遺跡」『文部科学教育通信』158：43。

西秋良宏・仲田大人・青木美千子・近藤修・米田穰・赤澤威（2005）「デデリエ洞窟の発掘調査と文化層序（2003-2004 年度）」『高知工科大学総合研究所紀要』2：32-64。

西秋良宏（2005）「新刊紹介：常木晃著『ハラフ文化の研究 - 西アジア先史時代への新視角』」オリエン ト 47(2)：162-163。

西秋良宏（2005）「北メソポタミア初期農耕文化の起源と展開に関する考古学的研究」『三菱財団第 35 回 事業報告書』：409-411。

西秋良宏（2005）「江上波夫先生旧蔵ユーラシアコレクション」『ウロボロス』9(3)：5-7

西秋良宏（2005）「初期人類の食料獲得戦略」『食糧獲得の考古学』：238-258。佐藤宏之編、朝倉書店。

【口頭発表】

Nishiaki, Y., S. Muhesen, and T. Akazawa（2006）“The Natufian occupations at the Dederiyeh cave, Afrin, Northwest Syria”. *The Fifth International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, Madrid, April 3-7, 2006.

西秋良宏（2006）「シリア、デデリエ洞窟の考古学的証拠と化石脳研究への寄与」『第 3 回化石脳・脳と知の共進化シンポジウム』東京大学山上会館、2006 年 5 月 19 日。

西秋良宏（2006）「アムッドとカフゼ：考古学的比較」『第 1 回化石脳プロジェクト研究会』自然科学研究機構生理学研究所、2006 年 3 月 16 日。

米田 穰・仲田大人・青木美千子・近藤 修・西秋良宏・赤澤 威（2006）「シリア共和国デデリエ洞窟における年代推定—ナトゥーフ文化遺構の放射性炭素年代」『日本人類学会第 60 回大会研究発表』高知工科大学、2006 年 11 月 3-5 日。

計画研究 セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究

藤井純夫（金沢大学文学部）

1. 研究組織

研究代表者：藤井純夫（金沢大学文学部教授）

研究分担者：足立拓朗（中近東文化センター附属博物館研究員）、徳永里沙（慶応大学文学部非常勤講師）

2. 研究の目的

セム系部族社会の形成過程を墓制面から追跡すること、それが本計画研究班の研究目的である。焦点となるのは、メソポタミア周辺の青銅器時代遊牧民の墓制である。バーディアト・シャーム（広義のシリア沙漠）の南北2地点、すなわちシリア東部のビシュリ山系とヨルダン南部のジャフル盆地で青銅器時代のケルン墓調査を実施し、都市形成期におけるセム系遊牧部族の具体的な足跡とその動向を明らかにしたい。

3. 研究の方法

上記の目標を達成するために、以下三つの調査を計画・推進してきた。

- 1) ヨルダン南部ジャフル盆地における青銅器時代ケルン墓群の継続調査。
- 2) シリア東部ビシュリ山系における青銅器時代ケルン墓の新規分布・発掘調査。
- 3) アラビア半島各地における円筒墓群などの踏査。

このうち、1) と 2) は北西セム語集団、3) は南西セム語集団の、形成過程を追跡することを意図している。ただし、本研究班では前者に力点を置き、後者は補足的にのみ実施する。

4. 2005-2006 年度の成果

- 1) ジャフル盆地（ヨルダン）のケルン墓調査： 同盆地では本特定領域研究の発足以前からケルン墓の調査を重ねてきた。発足後は、その資料整理と分析・総括に専念している。その結果、同盆地における（先土器新石器時代末から前期青銅器時代までの）約 4000 年間の墓制編年をほぼ構築することができた。この編年は、ビシュリ山系におけるケルン墓調査の比較資料として活用される。
- 2) ビシュリ山系（シリア）のケルン墓調査： 2007 年 2 月に短期の分布調査を実施し、スビーエ・ケルン群（Majmua ar-Rijum as-Subiye）を確認した。このケルン群は、ビシュリ山系西端の丘陵地帯を南北に縦走するルート上に位置し、約 10 基の小型ケルン墓から成る。個々のケルン墓は、直径約 5-7m × 比高約 0.5-1.0m の大きさで、風化の進んだ未加工の石灰岩（20-30cm 大）を用いて築造されていた（図 1）。地表面での観察によると、ジャフル編年でいう回廊型のシスト墓（前期青銅器時代 I 期後半）ではないかと予測される。この遺跡は、ビシュリ山系におけるケルン墓調査の突破口である。
- 3) アラビア半島の円筒墓踏査： 2005 年 11 月にオマーンの円筒墓踏査を実施し、バット（Bat）やワディ・ギズィ（Wadi Jizi）など、主要な青銅器時代円筒墓群の基礎データを収集した。同年 12 月には、バーレーン、カタール、エミレーツ、ヨルダンの円筒墓・シスト墓の踏査を追加実施した。バーレーンでは、サール（Sa'ar）、アアリ（'Ali）、ブリ（Buri）などの主要シスト墓群を踏査し、基礎データの収集に努めた。次のカタールでは、ウンム・サラール・アリ（Umm Salal Ali）やウンム・アル・マア（Umm al-Ma'）のシスト墓群を踏査した。アラブ首長国連邦では、ヒリ（Hili）、ジャバル・ハフィート（Jabal Hafit）の円筒墓群や、

カタッラー (Qatarrah) のシスト墓などを踏査した。また、ヨルダンではエル・アデイメ (el-Adeimeh)、エン・ナケー (en-Naqe)、フェイファ (Feifa) などのシスト墓群を観察・記録し、これに関連して、ダーミヤ (Damiya) やラウザ (Rawza) のドルメン群、ティワール・エツ・シャルキ (Tiwal esh-Sharqi) の竪坑墓群などの基礎データも収集した。続く 2007 年の 1 月にはイエメンの短期踏査を実施し、首都サナアの郊外で小規模の円筒墓群を観察した。

5. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか

セム系部族社会の原型がメソポタミア周辺乾燥域の初期遊牧民にあるとすれば、彼らの足跡を具体的に同定し、その内容を検討することが、当面の課題となる。しかし、初期遊牧民の足跡を捉えることは容易でない。そこで本班が着目するのが、彼らの墓制である。定住集落を形成しない遊牧民も、墓だけは造る。しかも、視認性の高い石積みの墓を造る。従って、この墓制をキーに、彼らの動向を探ることは十分可能であろう。しかも、彼らの墓域は部族ないしは氏族単位で造営されているので、部族社会の系譜をたどるには格好の手掛かりとなる。

本研究班のこれまでの調査研究は、こうした展望の下で実施されてきた。これによって、幾つかの見通しも得られた。つまり、1) 西アジア前期青銅器時代遊牧民の墓制が、北のシスト墓、南の円筒墓の二系統に大別できること、2) ジャフル盆地のシスト墓は、前期青銅器時代 1 期前半の前庭型シスト墓から始まり、同後期には回廊型シスト墓に変化してステップの内奥にまで分布を拡大していること (すなわち、遊牧民としての浸透が顕在化していること)、3) ビシュリ山系のケルン墓群に後者が含まれている可能性が高いこと (よって、ジャフル盆地と同時期にステップへの浸透を開始した可能性が高いこと)、などである。重要なのは、ステップから都市への遊牧民の浸透という従来の図式が必ずしも成り立たず、むしろ、定住農耕民からの遊牧化という逆の流れの方が強く感知されることである。これらの見通しは、セム系部族社会の形成問題にアプローチするための新たな手がかりを提供してくれるであろう。

6. 2007 年度以降の計画

2005-06 年度の活動によって、セム系部族社会の形成過程を追跡するために当初計画した 3 つの調査を平行して実施する体制が整った。また、幾つかの重要な見通しも得られた。それらをより詳細に検討するため、2007 年度以降、以下の調査・研究を計画している。

- 1) ジャフル盆地：墓制編年の最終点検 (2007-09 年度) と、タラアト・アビーダ 2 号ケルン墓群の発掘調査 (2008 年度)。後者は、前者のための補足調査であると同時に、青銅器時代遊牧民部族長の世襲制問題にアプローチするための新たな試みでもある。
- 2) ビシュリ山系：分布調査によるケルン墓群基礎データの収集 (2007 年度) と、発掘調査による墓制編年の構築 (2008-09 年度)。共に、マルトゥ・アムツルの具体的足跡を確認することが、最大の目標。
- 3) 各地の踏査：レバノンのドルメン (2007 年度)、およびサウジアラビア内陸部の擬壁ケルン墓の踏査 (2008-09 年度)。比較資料の充実のため。

これらの調査・研究を基にセム系遊牧部族社会の墓制編年を構築し、都市・集落のデータに偏りがちな従来の研究に新たな視点と展望を提示したい。



図1 スビーエ・ケルン墓群（シリア、ビシュリ山系）

本研究の直接的な成果（論文・報告）

藤井純夫

- 2005a 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」 Newsletter 『セム系部族社会の形成』 1: 6.
- 2005b 「ヒツジ遊牧の起源と展開：ヨルダン、ジャフル盆地の総合調査（2004年度）」日本西アジア考古学会編『第12回西アジア発掘調査報告会報告集』：26-37.
- 2006a 「ワディ・アブ・トレイハ：ヨルダン南部のPPNB遊牧拠点」日本西アジア考古学会編『第13回西アジア発掘調査報告会報告集』：35-47.
- 2006b 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」 Newsletter 『セム系部族社会の形成』 2: 5-7.
- 2006c 「計画研究班 セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」大沼克彦編『セム系部族社会の形成：平成17年度研究報告』 37-43.
- 2006d 「計画研究班 セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」大沼克彦編『セム系部族社会の形成：第2回シンポジウム：研究の現状と課題』 14-17.
- 2006e 「定住化遊牧民の集落内氏族配置と墓地・井戸の分有関係：ヨルダン南部、フセイニーエ村の事例研究」『西アジア考古学』 8（印刷中）.
- 2007a 「ワディ・アブ・トレイハ：ヨルダン南部のPPNB出先集落」日本西アジア考古学会編『第14回西アジア発掘調査報告会報告集』 45-51..

Fujii, S.

- 2006a Wadi Abu Tulayha: A Preliminary Report of the 2005 Spring and Summer Excavation Seasons of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 50 (forthcoming).
- 2006b A PPNB Agro-pastoral Outpost at Wadi Abu Tulayha, Southern Jordan. *Neo-Lithics* 02/06: 4-14.
- 2007a Wadi Badda: A PPNB Settlement below the Fjaje Escarpment in Southern Jordan. *Neo-Lithics* 01/07

(in print).

2007a Wadi Abu Tulayha: A Preliminary Report of the 2006 Summer Excavation Season of the Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 51 (in print).

2007c PPNB Barrage Systems at Wadi Abu Tulayha and Wadi Ruweishid as-Sharqi: A Preliminary Report of the 2006 Spring Excavation Season of the Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 51 (in print).

藤井純夫・足立拓朗

2007 「ワディ・アブ・トレイハとワディ・ルウェイシッド・アッ・シャルキ：先土器新石器時代の貯留式灌漑用ダム」日本西アジア考古学会編『第14回西アジア発掘調査報告会報告集』：45-51.

本研究の直接的な成果（口頭発表）

藤井純夫

2005a 「ヒツジ遊牧の起源と展開：ヨルダン、ジャフル盆地の総合調査（2004年度）」第12回西アジア発掘調査報告会（池袋、サンシャインシティ文化会館）.

2006b 「ワディ・アブ・トレイハ：ヨルダン南部のPPNB遊牧拠点」第13回西アジア発掘調査報告会（池袋、サンシャインシティ文化会館）.

2006c 「定住化遊牧民の集落内氏族配置と墓地・井戸の分有関係：ヨルダン南部、フセイニーエ村の事例研究」西アジア考古学会第12回大会（大正大学）.

2006d 「ウマイヤ朝の獵園 ワディ・ブルマ」日本オリエント学会第48回大会（早稲田大学）

2006e 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」特定領域研究：セム系部族社会の形成第2回シンポジウム（古代オリエント博物館）.

藤井純夫・足立拓朗

2007 「ワディ・アブ・トレイハとワディ・ルウェイシッド・アッ・シャルキ：先土器新石器時代の貯留式灌漑用ダム」第14回西アジア発掘調査（池袋、サンシャインシティ文化会館）

Hashimoto, H., M. Abe, and S. Fujii

2006 Skeletal Remains from the Tal'at Abydah Cairn Field, Jordan. (Poster session) WAC Intercongress, Osaka 2006.

本研究の間接的な成果（論文・報告）

藤井純夫

2007b 「先土器新石器時代の移牧春営地とダム：ヨルダン南部、ワディ・アブ・トレイハ遺跡の考古学的調査」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』18（印刷中）.

本研究の間接的な成果（口頭発表）

藤井純夫

2006d 「沙漠のドメスティケーション - ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化」2006年度国立民俗学博物館共同研究「ドメスティケーションの民族生物学的研究」（総合地球環境学研究所）

2007a 「遊牧と灌漑の年代：ヨルダン南部ジャフル盆地の調査から」第19回名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウム（名古屋大学）.

計画研究 西アジアにおける都市化過程の研究

常木 晃（筑波大学人文社会科学研究科）

1. 研究組織

研究代表者：常木 晃（筑波大学人文社会科学研究科教授）

研究分担者：三宅 裕（東京家政学院大学人文学部助教授）

山田重郎（筑波大学人文社会科学研究科助教授）

池田 潤（筑波大学人文社会科学研究科助教授）

石田恵子（古代オリエント博物館研究員）

2. 研究の目的

現在、都市の起源として欧米の学界で広く認められているのは、紀元前 3,500 年ごろのメソポタミア・ウルク期の巨大な集落遺跡群である。都市の出現は人間社会のあり方を根本的に変え、これ以降人類の歴史は都市を中心に回っていくことになる。現在でも都市は政治・経済・文化の発信基地となっており、世界の中心は都市にあるといっても過言ではない。それではなぜ都市が歴史に登場してきたのだろうか。この人類史の一大画期をめぐってこれまでも様々な仮説が提示され議論されてきた。環境変化や資源の偏在、戦争、交易など様々な要因が取り上げられてきたが、いまだ十分な解答が得られていないのが現状である。

私たちは、その大きな原因は、メソポタミアにおける都市の発生を農耕社会の発展という視点からしか捉えてこなかったことにあるのではないかと考えている。現代のアラブ社会を見ても、二律背反的な世界が実は 1 つの社会を形成し、歴史を動かしていることが分かる。都市と砂漠という、全く異なる環境に生きる都市民と遊牧民が、様々な部族社会的ネットワークで結びつき、互いに離反集合を繰り返しながら統合的な社会を形成しているのである。本研究ではこのような視点を重んじながら、都市形成に当たって遊牧社会に代表される部族社会が大きな役割を果たしたことを、考古学的、歴史学的、言語学的な資料を抽出することによって明らかにしていきたい。

3. 研究の方法

考古学分野では、シリアのイドリブ地域およびジャバル・ビシュリ地域で現地調査を行う。この 2 つの地域を取り上げるのは、地中海性森林帯を背景に都市的集落が早くから成立する前者と、草原砂漠帯で遊牧民の原郷とも目されてきた後者というように、自然環境や歴史的文化的状況が対照的なあり方を示すからである。しかしそれにもかかわらず、両地域の歴史発展の背景に、部族社会の影を色濃く看取することができる。

イドリブ地域では研究代表者が継続してきた先史時代の都市的集落であるテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査と出土遺物の整理研究を活用して、集落構造や出土遺物の中で部族性を表示すると思われる考古学的資料の抽出を目指す。また現代の集落形成プロセスを民族誌的に追跡することにより、部族社会が集落形成に果たした役割をダイナミックに再現したい。ジャバル・ビシュリ地域では、ユーフラテス河の氾濫原に営まれていた都市的集落遺跡と山系内に営まれていた遊牧民キャンプサイトや墓地遺跡の踏査を行い、相互の関連性を追跡することにより、部族社会が都市的集落の形成、展開に果たした役割の抽出を目指している。

歴史学、言語学分野では、セム系部族社会に関わる歴史的文献、セム語に関わる文献を収集し、その解題を進めるとともに、都市社会の形成過程にセム系部族社会がどのように関わってきたのかについての考察を

深める。特に文献に現れるセム系言語集団の系譜とビシュリ山系および西アジア各地との関わりについて整理し、都市的集落の出現、発展期である紀元前 3000 年紀から 2000 年紀にかけての部族社会に関わる歴史的、言語的事項を抽出したい。

4. 2005 – 2006 年度の成果

上記の目的、方法に沿って、2005～2006 年度に各分野で研究を開始、継続している。考古学分野では、イドリブ地域とジャバル・ビシュリ地域で現地調査を実施した。イドリブ地域のテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査では、巨大な新石器時代集落の中に認められる住居様式にいくつかの相違が認められること、特に個人や家族を表象していると見られる印章・印影システムの中に 2 つの大きな人間集団の存在が看取できること、などが明らかとなった。これらの相違が部族社会を表象している可能性は大きい。もしそうであるとするならば、少なくとも新石器時代に部族社会の起源をたどることができることになる。またイドリブ県に所在する現代の村落のうち、農耕民と定住遊牧民の村落を選んでその成立過程について、民族誌的調査を継続している。この調査では、現地で使われているアーイラティ、アツタイファ、タビーレなど、家族や一族、部族を表す表現と、実際の住居配置がどのように関わって集落が形成されてきたかを、いくつかの事例で明らかにすることができた。ジャバル・ビシュリ地域については、2007 年 2 月～3 月にかけて実施された領域全体の第 1 回現地調査に、本計画研究班から研究代表者と研究協力者の 2 名が参加している。その成果に関しては総括班の報告に譲るが、私たちの関心は特に、先史時代から青銅器時代にかけてのユーフラテス河沿いとビシュリ側台地上の遺跡の相互関係にある。

歴史学分野では、セム系部族社会に関わる多くの歴史文献を収集するとともに、その解題を研究分担者の山田重郎が進めている。特に文献に現れるセム系言語集団の系譜とビシュリ山系との関わりについての基本的事項を網羅的に整理した。その結果、セム諸語、セムに関わる古代文献の一覧、その一部の内容などを明確にすることができた。その成果は本特定領域研究の Newsletter No.2 に、「文書史料におけるセムの系譜、アムル人、ビシュリ山系」と題した論文として発表されている。山田重郎はこのような研究とともに、本特定領域の計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」班に協力してテル・タバン遺跡出土の古バビロニア時代文書の解読も進めている。

言語学分野では、研究分担者である池田潤が、セム語に関連する文献資料を収集し解題を進めている。これまで、特にセム語の起源についての各説（メソポタミア起源説、アラビア半島起源説、複数起源説、アフリカ起源説、シリア・パレスチナ起源説）を整理検討するとともに、比較言語学から見たセム語の原郷について、セム祖語として再建される語彙を抽出、検討している。その結果、セム語の原郷は農耕牧畜が行われていた地域内にあることが明らかにされ、比較言語学から見るとビシュリ山系は「セム語族」の原郷ではないという、非常に興味深い結論が引き出されている。この池田潤の研究成果は、2006 年 10 月に行われた本特定領域研究の研究発表会の中で、「比較言語学から見たセム語の起源」として口頭発表された。

考古学分野のジャバル・ビシュリ地域の現地調査および歴史学・言語学分野の研究では特に紀元前 3000～2000 年紀に関わる資料の渉獵が進行中である。さらに、同時期の文書記録と密接に関わる円筒印章について、研究分担者の石田恵子により基礎的研究が進められている。

5. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか

考古学分野の研究では、セム系とは限定できないものの、部族性の抽出に努めている。民族誌的な研究においては、部族と物質文化のかかわりを明確にし、物質文化と部族性がどのように関連するのかを探っている。歴史学、言語学分野の研究では、研究テーマがセム系社会の出現やセム語の原郷の解明であり、まさに

セム系部族社会の形成という本特定領域研究のテーマそのものであるといえる。これらの3分野の研究成果を、都市の形成過程というキーワードで統合することが、これからの課題といえる。

6. 2007年度以降の計画

考古学分野では、イドリブ地域およびジャバル・ビシュリ地域での現地調査をさら継続し深化させる。イドリブ地域の調査では、中核となるテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を継続し、いくつかの戦略的な遺構遺物に基づいて、部族社会がどこまでさかのぼり得るかを追跡する。民族誌的調査では、実際の部族社会のありようと現実の住居配置などとの関連を、多数の村落について調査し蓄積していく予定である。ジャバル・ビシュリ地域の現地調査は開始されたばかりであり、2007年度、2008年度については領域全体の現地調査時に本研究班からも研究分担者・研究協力者を派遣し、特にユーフラテス河右岸流域とジャバル・ビシュリ側台地上の遺跡の相互関係を捉えることを目標に踏査研究を進めたい。各遺跡の測量調査や詳細表面調査、遺物の比較研究などを予定している。歴史学、言語学分野の研究では、セム系社会の出現に続く発展の状況やセム語の原郷からの展開について、文献資料に基づく研究をさらに深化させる。ここでは、計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」や「シュメール文字文明の成立と展開」などの研究班とも連携して研究を進めていきたい。

本計画研究班の研究成果を統合するために、2007年度～2008年度に、「都市文明とコミュニケーション」をテーマとしたシンポジウム開催を予定している。

7. 2005 - 2006年度の業績（本研究に関連するもの）

常木 晃 「シリアの民族誌から見た土器生産の専門化」『世界の土器づくり』（佐々木幹雄・斉藤正憲編）〔同成社〕（分担）61～82頁 2005年12月

常木 晃 「オリーブの文化誌 その1」Oriente 32 [古代オリエント博物館] 19頁～28頁 2006年1月

Tsuneki,A., and Zeidi,M. “Iran/Japan Archaeological Expedition to the Sivand Dam Salvage Area, 2005” *Abstracts Symposium on the Archaeological Rescue Excavations in the Bolaghi Valley*, Iranian Center for Archaeological Research, Shiraz. pp.9-12. 2006年2月

常木 晃 「新石器時代の巨大集落—シリア、テル・エル・ケルク遺跡の2005年度調査—」『今よみがえる古代オリエント 2005』日本西アジア考古学会 pp. 29-34. 2006年3月

常木 晃、山内和也 「イラン・ファルス地方シヴァンド川ダム建設に伴う遺跡救済プロジェクト」『今よみがえる古代オリエント 2005』日本西アジア考古学会 pp. 85-91. 2006年3月

常木 晃 「おわりに」『筑波大学考古学資料カタログ 1. イスラム陶器』 35～35頁 2006年3月

Tsuneki,A. “A Large and Complex Neolithic Settlement at Tell el-Kerkh, Syria” *Abstracts, 5th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Madlid*, pp.69. 2006年4月

常木 晃 「西アジア新石器時代における封泥システムの発達—テル・エル・ケルク遺跡の調査から—」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』 278～281頁 2006年5月

常木 晃 「イラン・シバンド川ダム建設に伴う遺跡救済プロジェクト」オリエンテ 33：裏表紙 2006年7月

常木 晃 「考古学フィールドとしてのジャバル・ビシュリ」『Newsletter セム系部族社会の形成』No. 3 1～8頁 2006年8月

Tsuneki,A., Arimura,M., Maeda,O., Tanno,K., and Anezaki,T. “The early PPNB in the north Levant: A new

- perspective from Tell Ain el-Kerkh, northwest Syria”, *Paléorient* 32/1: 47-71, 2006 年 12 月
- 常木 晃、小高敬寛 「新石器時代の巨大集落—シリア、テル・エル・ケルク遺跡の 2006 年度調査—」『考古学が語る古代オリエント 2006』日本西アジア考古学会 pp. 29-34. 2007 年 3 月
- 常木 晃、長谷川敦章 「シリア、ラタキア県における考古学的踏査— 2006 —」『考古学が語る古代オリエント 2006』日本西アジア考古学会 pp. 88-94. 2007 年 3 月
- 常木 晃 「イラン、ファルス地方シヴァンド川ダム建設に伴う遺跡救済プロジェクト」『考古学が語る古代オリエント 2006』日本西アジア考古学会 pp. 112-121. 2007 年 3 月
- 三宅 裕 「西アジアにおける土器の起源を探る：トルコ、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡第 2 次調査『平成 17 年度今よみがえる古代オリエント 第 13 回西アジア発掘調査報告会報告集』 48-55 頁 日本西アジア考古学会 2006 年 3 月
- 三宅 裕 「西アジア先史時代におけるパイロテクノロジー - 銅冶金術のはじまり」『国土館考古学』第 2 号 37-55 頁 2006 年 9 月
- Miyake, Y. Yili Diyarbakie Ili, Salat Cami Yani Kazisi. 27. *Kazi Sonuclar Toplantisi 2. Cilt.* 117-30 頁 2006 年 5 月
- 山田重郎 「文書史料におけるセムの系譜、アムル人、ビシュリ山系」『Newsletter セム系部族社会の形成』No. 2 8～13 頁 2006 年 3 月
- Yamada, S. "The City of Togarma in Neo-Assyrian Sources" *Altorientalische Forschungen* 33 (2006), 223-236.
- 山田重郎・柴田大輔「2005/2006 年シリア、テル・タバノ出土楔形文字文書」『平成 18 年度 考古学が語る古代オリエント—第 14 回西アジア発掘調査報告会報告集』, 西アジア考古学会, 2007, 128-131 頁.
- Yamada, S. "Shulgi Prophecy: A Review of Its Historical Contents," *Acta Sumerologica* 23 (Yoshikawa Volume) (forthcoming).
- 山田重郎 「イスラエルの王アハブとアッシリア」『聖書の世界』16 号 (2007)
- Yamada, S. "Qurdi-Assur-lamur: His Letters and Carrier," in M. Cogan and D. Kahn (eds.), *New Studies in the History of Israel and the Ancient Near East* (Scripta Hierosolymitana FS Israel Eph'al), Jerusalem (forthcoming).
- 山田重郎 「列王記とメソポタミアの歴史文書」『CISMOR ユダヤ会議—第 2 回：Papers & Discussions』、同志社大学一神教学際研究センター、2007
- 池田 潤 「文献言語学序説」橋本邦彦他 (編)『実験音声学と一般言語学』東京堂出版, 2006, 325-334.
- 池田 潤 「GIS と言語研究」『一般言語学論叢』第 9 号 (2006), 1-10
- 池田 潤 「楔形文字入門」*Oriente* 34 (2007), 4-9.
- Ikeda, J. "Relational Units in Cuneiform Writing: Two Cases of Comparative Graphemics", *Acta Sumerologica* 23 (2006), 印刷中.
- 石田恵子 「印章におけるスペード形樹木」『古代オリエント博物館研究紀要』26 pp.43 - 57、2006 年

計画研究 北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究

沼本宏俊（国土舘大学体育学部）

研究組織

- 研究代表者：沼本宏俊 国土舘大学体育学部 研究総括
研究分担者：柴田英明 国土舘大学理工学部 遺跡の測量、建築遺構の調査
研究分担者：北野信彦 くらしき作陽大学食文化学部 遺物の保存処理・分析
研究分担者：小泉龍人 古代オリエント博物館共同研究員 出土遺物・遺構の調査
研究分担者：真保昌弘 栃木県那珂川町教育委員会 出土遺物・遺構の調査

1. 研究目的

近現代の列強の帝国主義は、北メソポタミアで興隆したセム系民族が築いた世界最古の帝国の一つ“アッシリア”にその原点があったと見られ、この帝国の諸様相の実体解明が将来の世界の動向を予察し、人類の未来への新たな展望を見出すうえで非常に重要である。したがって、本研究では、アッシリア時代の遺跡の発掘調査や既存の考古・文献資料の多角的な分析を行い、新たな知見を提供し、未だ不明瞭なアッシリアの勢力範囲、支配体制、社会構造の全容解明への貢献を主眼とする。特に、帝国化の黎明期に相当する前2千年紀のアッシリアと近隣諸国との従属関係や帝国化の発展過程を探り、アッシリア帝国の興亡と帝国主義の実体の究明に焦点を置いている。

2. 研究方法

①本研究期間内には研究遂行の一環としてシリア北東部のバブール川中流域にあるアッシリア時代の拠点遺跡、テル・タバンの発掘調査を実施する。同遺跡は古バビロニア時代(前19-18世紀頃)のマリ文書や中期・新アッシリア時代(前13~11世紀頃・前9-7世紀頃)の首都アッシュールやニネヴェ出土の文書に登場する同流域の統轄拠点として繁栄した古代都市“タバトゥム/タベトゥ”に古くから比定されている遺跡でもある。同遺跡の以前の調査では多数の中期アッシリア時代の楔形文字資料が出土したことや、古~新アッシリア時代(前2~1千年紀)の連続した層序を包含していることを確認しており、本研究を遂行するうえで最適の遺跡である。特に、本研究期間内には出土文字資料・遺構・遺物から暗黒時代とされている中期アッシリア時代の編年の構築を目指している。

②テル・タバンの1997-99、2005年冬季調査で出土した中期アッシリア時代の楔形文字資料と本研究期間内の調査で出土する文字資料の解読と分析を行い、それらの成果をとおしてアッシリア史の解明に向けて欧米学会が渴望している新情報を提供する。

③ビュシュリ山系の遺跡の発掘調査。前3~1千年紀の拠点遺跡の調査に焦点を置いており、出土遺構・遺物から同時代のハブール川中流域(北メソポタミア)とユーフラテス川中流域の文化的関連を究明する。

④各計画研究班との連携した共同研究を行う。

3. 2005, 2006年度の成果

本研究計画の中核としているテル・タバン遺跡の発掘調査と出土遺物の分析に重点を置き以下の研究を遂行した。

① 2005、2006年度は各8月中旬～10月中旬までテル・タバン遺跡の発掘調査を行った。2005年冬季調査で大量の粘土板文書が出土した中期アッシリア時代（前13～12世紀）の王宮の文書保管庫を継続発掘した結果、新たに35点の粘土板文書を発見した。最大の成果は、中期アッシリア時代の下層から古バビロニア時代（前18世紀）の生活層を発見したことと、同時代の土器窯の中から25点の焼成された粘土板文書が出土したことである。ハブール川中・下流域での古バビロニア時代の粘土板文書の発見は最初で、記述内容が国内外で注目されている。

② ダマスカス博物館において、同遺跡の2005年冬季調査で文書保管庫から出土した粘土板文書の解読を行った。総数約400点に及ぶ粘土板文書の約半数の保存修復処理が完了しており、これらの文書は前13～12世紀の古代王国“タベトゥ”（テル・タバン）の王宮の行政文書であったことが判明した。解読も徐々に進み新事実が明らかになりつつあり、今後、解読がさらに進めば宮殿建立の王名や年代、歴代の王の足跡、さらにはアッシリア帝国主義体制の形成過程の解明が期待される。

古バビロニア時代の粘土板文書は記述内容から前18世紀後半に年代付けられ、その多くはユーフラテス川流域の都市“テルカ”の王からの書簡であったことが明らかになった。最大の成果は、これらの文書の記述内容からタバンはマリ文書にも認められる同時代のハブール川中流域の要衝“タバトゥム”であったことを実証した点である。

2005、2006年度の解読成果は、未だ不明瞭な北メソポタミアの前二千年紀の実体を解明するうえで、学会待望の第一級の貴重な新資料である。なお、日本調査隊が発掘した膨大な楔形文字資料を、日本人研究者が本格的に解読したのは今回が最初である。

③ 2006、2007年の2月に各10日間程テル・タバンに行き、同遺跡の現況視察と夏季調査で出土した遺物の整理と分析を行った。

④ 国内に保管しているテル・タバン遺跡の過去の調査で出土した約3000点の古バビロニア時代～新アッシリア時代の土器の整理分析を開始した。洗浄、注記、分類、実測、写真撮影等の基礎的な作業で継続中である。本資料は、未だ確立されていない北メソポタミアの前2千年紀～1千年紀にかけての土器編年を構築するうえで数少ない資料で、分析結果を公表すれば同時代の土器研究を行う際の標準になるのは確実である。

⑤ テル・タバン遺跡出土の粘土板文書片と王宮の彩色壁片の胎土分析と顔料分析を行った。一部の資料の分析結果は判明したが、大半の資料は分析中である。

⑥ ダマスカス博物館で粘土板文書群の保存修復をシリア人研究者と協同行った。作業は現在も継続し行われている。

4. 研究成果の「セム系部族社会の形成」の研究への寄与

テル・タバン遺跡は、ユーフラテス川の支流ハブール川の中流域にある前2～1千年紀の拠点として繁栄した遺跡である。地理的にもセム系民族アムル人の源郷であるビュシュリ山系から北東約120kmの地点にあり、両地域は水系こそ異なるが有史以来、同一の文化圏に属し密接に関係していたと考えられる。2005、2006年度のテル・タバンの調査では、上記したように中期アッシリア時代の粘土板文書と古バビロニア時代の層位から粘土板文書を発見することができた。楔形文字資料の発見と解読成果が、アッシリアと同じセム系民族アムル人の源流と特質を探求するうえで最も有効であることは言うまでもない。これらの文書の解読が進み、文中にアムル語系の人名、地名等が登場すれば、アムル人の勢力・移動範囲や拡散過程、アッシリアとの関連等を知るうえで大きな手掛かりになる。こうした面でも2005、2006年度の本研究計画班の成果は、「セム系部族社会の形成」の研究遂行に大きな貢献を成したと言える。

5. 2007年度以降の計画

- ①本年度選定したビュシュリ山系の遺跡の発掘調査に参加する。各年度調査に参加する予定である。
- ②アッシリア帝国の西方進出拠点、テル・タバンの遺跡の調査を各年度約2ヶ月間実施する。調査は中期・新アッシリア時代の主要建物跡、古バビロニア時代の層位の発掘と新たな楔形文字文書の発見に重点を置く。
- ③既に出土している総数約400点の中期アッシリア時代の粘土板文書と25点の古バビロニア時代の粘土板解読を、同文書が保管されているダマスカス博物館で行う。新たに出土した文字資料の解読を行う。解読成果の概要は各年度公表する。
- ④国内では文献資料の調査とテル・タバンの遺跡出土の土器、遺物の整理分析、および報告書の作製を行う。

出版論文等（直接的成果）

沼本宏俊（研究代表者）

Numoto H. 2007 “Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria (5), Preliminary Report of the 2005 Summer Season of Work”, *al-Rafidan*, Vol.XXVIII, 1-63.

Numoto H. 2006 “Excavation at Tell Taban, Hassake, Syria (4), Preliminary Report of the 2005 Winter Season of Work”, *al-Rafidan*, Vol.XXVII, 1-43.

沼本宏俊 2007 「テル・タバンの粘土板文書が出土した土器窯」『セム系部族社会の形成』、特定領域研究 Newsletter、No.4：。

沼本宏俊 2007 「粘土板文書を発見！テル・タバンの遺跡の発掘調査（2006年）」『考古学が語る古代オリエント』、第14回西アジア発掘調査報告会報告集：122-127。

沼本宏俊 2006a 「シリア、テル・タバンの遺跡の発掘調査（2005年）」『国土館考古学』第2号：57-77。

沼本宏俊 2006b 「粘土板文書を発見！テル・タバンの遺跡の発掘調査（2005年）」『今よみがえる古代オリエント』、第13回西アジア発掘調査報告会報告集：56 - 62。

沼本宏俊 2005 「シリア、テル・タバンの遺跡」『考古学研究』52-2、考古学研究会編：109-111。

柴田大輔（研究協力者）

Shibata D. 2007 “Middle Assyrian Administrative and Legal Texts from the 2005 Excavation at Tell Taban: A Preliminary Report”, *al-Rafidan*, Vol.XXVIII, 65-76.

柴田大輔、山田重郎 2006 「2005年テル・タバンの出土楔形文字文書について」『今よみがえる古代オリエント』、第13回西アジア発掘調査報告会報告集：63-66。

山田重郎、柴田大輔 2007 「2005 / 2006年 シリア、テル・タバンの出土楔形文字文書」『考古学が語る古代オリエント』、第14回西アジア発掘調査報告会報告集：128-131。

シュテファン M マウル、柴田大輔（訳）2006 「テル・タバンの出土碑文（1997-1999年度発掘調査）」、ラフィダーン第XXVII巻：117-182。

山田重郎（研究協力者）

山田重郎、柴田大輔 2007 「2005 / 2006年 シリア、テル・タバンの出土楔形文字文書」『考古学が語る古代オリエント』、第14回西アジア発掘調査報告会報告集：128-131。

柴田大輔、山田重郎 2006 「2005年テル・タバンの出土楔形文字文書について」『今よみがえる古代オリエント』、第13回西アジア発掘調査報告会報告集：63-66。

口頭発表（直接的成果）

沼本宏俊（研究代表者）

- 2007年3月 「シリア、テル・タバン遺跡の発掘調査（2006年）」、日本西アジア考古学会主催第14回西アジア発掘調査報告会報告会。於サンシャイン文化会館。
- 2006年7月 「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究、テル・タバン遺跡の発掘調査（2005年）」、特定領域研究、セム系部族社会の形成：ユーフラテス川中流域ジュシュリ山系の総合研究、第2回シンポジウム。於サンシャイン文化会館。
- 2006年3月 「シリア、テル・タバン遺跡の発掘調査（2005年）」、日本西アジア報告会主催第13回西アジア発掘調査報告会報告会。於サンシャイン文化会館。
- 2005年7月 「楔形文字文書を発見、シリア、テル・タバン遺跡の発掘調査」、朝日カルチャーセンター。於新宿住友ビル。

柴田大輔（研究協力者）

- 2007年3月 「2005 / 2006年 シリア、テル・タバン出土楔形文字文書」、日本西アジア報告会主催第14回西アジア発掘調査報告会。於サンシャイン文化会館。
- 2007年1月 「中期アッシリア時代における紀年職研究の現状とテル・タバン出土中期アッシリア行政文書の年代」、日本西アジア考古学会第一回シンポジウム「西アジア考古学の編年：日本考古学調査団からのアプローチ」。於サンシャイン文化会館。
- 2006年3月 「2005年テル・タバン出土中期アッシリア行政文書」、第49回シュメール研究会。於京都大学京大会館。
- 2006年3月 「2005年テル・タバン出土楔形文字文書について」日本西アジア考古学会主催第13回西アジア発掘調査報告会。於サンシャイン文化会館。

山田重郎（研究協力者）

- 2007年3月 「2005 / 2006年 シリア、テル・タバン出土楔形文字文書」、日本西アジア考古学会主催第14回西アジア発掘調査報告会。於サンシャイン文化会館。

計画研究 西アジア先史時代から都市文明社会への生産基盤の 変化に関する動物・植物考古学的研究

本郷一美（総合研究大学院大学先導科学研究科）

1. 研究組織

研究代表者：本郷一美（総合研究大学院大学：動物遺存体の分析による家畜化と牧畜技術の発達過程の研究を担当するとともに、食料生産・流通・消費に関する研究の総括を担当する）

研究分担者：丹野研一（総合地球環境学研究所非常勤研究員：植物遺存体の分析による栽培化と農耕の発達に関する研究。新たに加わる那須と分担して植物質食料の生産・消費に関する研究を行う。トルコとシリアの資料を担当する）

那須浩郎（総合研究大学院大学葉山高等研究センター：研究分担者の丹野とともに植物質食料の生産・消費に関する研究を担当するため。ヨルダンの資料を担当する）

茂原信生（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター客員研究員：本郷とともに動物骨の分析を担当する。特に遺跡出土の犬骨の形態分析データを蓄積する）

研究協力者：姉崎智子（群馬県立自然史博物館）

Lubna Omar（京都大学大学院）

赤司千恵（早稲田大学大学院）

2. 研究の目的

本研究の目的は、動物考古学と考古植物学の手法を用い、西アジアの先史時代社会から古代都市文明社会への移行過程における生業基盤の変化を明らかにすることである。セム系部族社会の成立の前提として、どのような動物性資源と植物性資源が利用可能であったか、各時代でその利用にどのような変化が生じたかを把握するために、広範囲にわたる遺跡で資料の収集を行う。都市の出現の背景として、特に食料生産技術の発達、集約化と分業化の進行は重要であったと考えられる。重要な研究課題として以下のものがある。

- 1) 偶蹄類の家畜化と植物の栽培化
- 2) 牧畜技術の発達、特に乳製品利用技術の発達と遊牧の開始
- 3) 生産性の高い作物品種の成立
- 4) 動植物生産品の交易
- 5) 古代都市国家の成立基盤

3. 研究の方法

考古遺跡から発掘された動物骨資料の分析（種同定、サイズの計測、死亡年齢の推定）を行う。植物遺存体資料は、遺跡からサンプリングした土からフローテーション法を用いて炭化種子を選別し、種同定を行う。

4. 2005-2006 年度の調査と成果

2005-2006 年度は、食料生産の開始と初期の農耕・牧畜の様相を明らかにすることを中心に研究を進め、シリア、トルコ、ヨルダン、イランの以下の新石器時代遺跡の動植物遺存体資料収集を行った。

植物遺存体資料の収集と分析

シリア

デデリエ遺跡（ナトゥーフ期）

セクル・アル・アヘイマル（PPNB および土器新石器時代）

テル・エル・ケルク（PPNB および土器新石器時代）

トルコ

サラット・ジャーミ・ヤヌ（土器新石器時代）

ヨルダン

ワジ・アブ・トレイハ（PPNB）

動物遺存体資料の収集と分析

トルコ

チャヨヌ（PPNA, PPNB, 土器新石器時代）

サラット・ジャーミ・ヤヌ（土器新石器時代）

イラン

タンギ・ボラギ（終末期旧石器時代、前新石器時代）

シリア

テル・エル・ケルク（PPNB および土器新石器時代）

ヨルダン

ワジ・アブ・トレイハ（PPNB）

2006 年度の海外渡航

本郷一美（研究代表者）

資料の収集と分析

2006 年 1- 2 月（トルコ）、5 月（トルコ）、8 - 9 月（トルコ・ヨルダン）

2007 年 1-2 月（トルコ・イラン）

丹野研一（研究分担者）

資料の収集と分析

2006 年 7 - 9 月（シリア、トルコ、ヨルダン）

那須浩郎（研究分担者）

資料の収集と分析

2006 年 9 月（ヨルダン）

5. 2007 年度の調査計画

ビシュリ山系における発掘調査が始まることに伴い、出土した動物・植物遺存体資料の収集と分析に着手する。ビシュリ山系の調査で得られる前期青銅器時代の資料から、牧畜と農耕が古代都市国家の経済的成立基盤となる過程を明らかにすることをめざす。乳製品や羊毛など、経済の重要な部分を占める動物性生産物の利用がいつ始まったか、生産性の高い作物品種の開発過程について探る目的で、牧畜と農耕の起源地の一つであるチグリス川、ユーフラテス川上流域（トルコ南東部）の新石器時代末の資料の分析も継続する。一方、ビシュリ地域における古代都市国家成立の担い手であったセム系部族社会は、遊牧に生業基盤をおく周

辺の集団と密接な関わりを持っていたと考えられることから、遊牧技術の成立に関する研究も継続する。

6. 出版物

Fukunaga, K., H. Nasu and Y. Sato. 2005. An attempt of the wheat/barley ancient DNA analysis of the samples from Kaman-Kalehoyuk. *Anatolian Archaeological Studies*. 14: 165-166.

Hongo, H., Meadow, R. H., Öksüz, B., Ilgezdi, G. (2005) Sheep and Goat Remains from Çayönü Tepesi, Southeastern Anatolia. In H. Buitenhuis, A.M. Choyke, L. Martin, L. Bartosiewicz and M. Mashkour (eds.), *Archaeozoology of the Near East VI*: 113-124. Proceedings of the sixth international symposium on the archaeozoology of southwestern Asia and adjacent areas. Groningen, ARC-Publicaties 123.

本郷一美・南真木人 (2005) ヤイラで過ごすトルコの夏. 「季刊民族学」 113:3-25

本郷一美 (2007) イノシシがブタになるときー小さな骨からひもとく歴史の事実— 「月刊みんぱく」 2007.1 : p.5.

本郷一美 (2006) 「ヒトコブラクダの家畜化と伝播」 『西南アジア研究』 65 : 56-72.

Pruvost, M. *et al.* (2007) Freshly Excavated Fossil Bones are Best for Amplification of Ancient DNA. *PNAS* 104(3): 739-744.

Tanno, K., and Willcox, G. (2006) How fast was wild wheat domesticated?, *Science*, 311 (5769), 1886

Tanno, K., and Willcox, G. (2006) The origins of cultivation of *Cicer arietinum* L. and *Vicia faba* L.: Early finds from northwest Syria (Tell el-Kerkh, late 10th millennium BP), *Vegetation History and Archaeobotany*, 15, 197-204

Tsuneki, A., Arimura, M., Maeda, O., Tanno, K., and Anezaki, T. (2006) The early PPNB in the north Levant: A new perspective from Tell Ain el-Kerkh, northwest Syria, *Paleorient*, 32(1), 47-71

Willcox G. and Tanno K. (2006) How and when was wild wheat domesticated? Response, *Science*, 313 (5785), 296-297

7. 口頭発表

Hongo, H. (2005) Animal Exploitation and the Process of Ungulate Domestication in Southeastern Anatolia. International Symposium Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond. (July 8-9, the University Museum, The University of Tokyo)

本郷一美 (2005) 西アジアにおける偶蹄類の家畜化過程 (総合研究大学院大学葉山セミナー 12月5日)

Hongo, H., Pearson, J., Öksüz, B., Ilgezdi, G. (2006) Domestication Process of Ungulates in Southeastern Anatolia: A Multidisciplinary Approach at Çayönü. 71st Annual Meeting of the Society for American Archaeology. (April 26-30, San Juan, Puerto Rico).

Hongo, H., Rabinovitch, R., Kolska Horwitz, L. (2006) Putting the Meat on Old Bones. A Reassessment of Fauna from the Japanese Excavations at the Middle Palaeolithic Site of Amud. The VIIIth International Conference of Archaeozoology of Southwestern Asia and Adjacent Areas. (June 27-30 Maison de l' Orient et de la Méditerranée, Lyon, France)

本郷一美 (2007) 西アジアにおける牛の家畜化 (ドメスティケーション研究会 1月22日 岩手県, 牛の博物館)

8. 一般向け講演

本郷一美 (2006) 動物の骨が語る古代人の暮らし (12月16日 神奈川県, 湘南国際村アカデミア)

9. 報道 (丹野研一の業績に関連するもの)

2006年9月6日 リベラシオン紙 (フランス) 「L'âge de blé」 (Liberation Samedi 9 septembre 2006 L'âge de blé. Par S. HUET. Jalès envoyé spécial à Jalès.)

2006年5月27日 産経新聞 (文化・20面) 「ソラマメの秘密」

2006年5月21日 毎日新聞 (3面) 「最古のソラマメ-約1万5000年前 シリアの遺跡」

2006年5月21日 MSN毎日インタラクティブ「最古のマメ：シリア北西部の新石器時代遺跡で発見 地球研」<http://www.mainichi-msn.co.jp/science/kagaku/news/20060521k0000m040116000c.html>

2006年5月8日 毎日新聞 (2面) 「農耕の移行期間 判明-3500年以上かけゆっくりと」

2006年5月8日 Yahoo!Japan (毎日新聞) 「<農耕移行>3500年以上かけゆっくり進行 定説変える？」
<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20060508-00000002-mai-soci>

2006年4月15日 Science News 誌 (アメリカ) <'Of Note: Archaeology'> “Early farmers took time to tame wheat” (vol.169 pp237)

2006年4月10日 Science & Vie Junior (フランス) En combien de temps l'homme s'est-il fait son blé ?

2006年4月3日 Le Figaro. (フランス) Le long chemin de la domestication du blé.

2006年4月2日 しんぶん赤旗 (社会・総合/14面・科学のひろば) 「栽培種定着 ゆっくり進行-コムギ農耕史 日本人研究者ら発見」

2006年4月1日 Le Dauphiné. (フランス) Des blés aux pains, une histoire de 7000 ans.

2006年3月31日 Science Magazine (今週のハイライト・和文要訳/コスモ・バイオ株式会社提供) 「コムギ栽培化への道」<http://www.sciencemag.jp/>

Ushuaïa magazine vol. 10 P 84. (フランス) L'Homme et le Blé: une vieille histoire.

CNRS International (フランス) N° 3 Spring 2006 p 14. The domestication of wild wheat.

計画研究 環境地質学、環境化学、¹⁴C年代測定にもとづく ユーフラテス河中流域の環境変遷史

星野光雄（名古屋大学大学院環境学研究科）

研究代表者：星野光雄（名古屋大学大学院環境学研究科教授）：研究統括、地質・地形

研究分担者：田中 剛（名古屋大学大学院環境学研究科教授）：環境化学

中村俊夫（名古屋大学年代測定総合研究センター教授）：¹⁴C年代測定

吉田英一（名古屋大学博物館助教授）：地質・地形、環境化学

束田和弘（名古屋大学博物館助手）：地質・地形、花粉分析

研究協力者：桂田祐介（名古屋大学博物館研究員）：画像解析

齊藤 毅（名城大学理工学部助教授）：花粉分析

1. 研究の目的

自然科学的・環境科学的現地調査と室内実験にもとづいて、地質時代から先史時代、「セム」系部族社会の形成を経て現在に至るユーフラテス河中流域ビシュリ山系の環境変遷史を構築する。

2. 研究の方法

- (1) 地質学的・地形学的研究：ユーフラテス河流域ービシュリ山系の地質・地形発達史を解明する。とくに、第四紀の地形・段丘発達史の解明と遺跡発掘地域周辺の地質層序の確立に力点を置く。（主たる担当者：星野、吉田、束田）
- (2) ¹⁴C年代測定：堆積物・遺跡から産出する炭質物を¹⁴C年代測定法で分析し、堆積物の各層準と遺物の正確な時代を決定する。（主たる担当者：中村）
- (3) 環境化学的研究：岩石・堆積物の化学組成、同位体組成の分析から、気候や水質などの環境条件の変遷を解明する。また、遺跡で利用された石材や胎土の産地を化学的に推定する。（主たる担当者：田中、星野、吉田）
- (4) 花粉分析：堆積物の各層準に含まれる花粉化石を抽出し、堆積当時の植生を推定する。（主たる担当者：齊藤、束田）
- (5) 画像解析：衛星画像・空中写真・地図情報の解析により、広域的な環境情報を抽出する。（主たる担当者：桂田）

3. 2005－2006年度の成果

- (1) シリア北東部、テル・タバンの遺跡産の礫に関する岩石学的研究（星野・大沼）

国士舘大学調査隊がシリア北東部ハブール川中流域のテル・タバンの遺跡から採集した礫について、詳細な岩石記載とEPMA分析を行い、それらの履歴を推定した。その結果、①テル・タバンの遺跡基底の堆積層の礫に関しては、元々砂岩礫であったものが、その後の二期に亘る異なった環境下で風化作用を蒙った履歴が推定された。②ミタンニ壁直下の礫に関しては、乾燥環境下の蒸発が盛んな浅海あるいは湖で、石膏を主体とした塩類が析出・堆積してできた蒸発岩を源岩とし、その後、地表で風化作用を受け、炭酸塩鉱物が選択的に溶脱した履歴が推定された。

(2) 西アジア考古学遺跡発掘試料の放射性炭素年代測定 (中村・藤井)

^{14}C 年代測定を実施した 6 個の試料は、西アジアのセム系遊牧部族の墓遺跡から藤井によって採集された炭化樹木・草本類である。炭素安定同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ 値は、 $-9 \sim -10\%$ および $-18 \sim -26\%$ に二分され、前者は C4 植物起源の炭化物、例えばアワ、ヒエ、キビなどの雑穀類が示唆され、後者は C3 植物起源の炭化物と推定される。炭化物の ^{14}C 年代 $5893 \pm 37 \text{ BP} \sim 4304 \pm 35 \text{ BP}$ から推定される較正暦年は $6750 \sim 4840 \text{ cal BP}$ となった。

(3) ビシュリ山系現地調査 (星野・田中・中村)

2007 年 3 月 9 日～3 月 18 日に第一次現地調査を実施した。ラッカ南部のユーフラテス河流域ービシュリ山系を構成する第三紀中新世堆積岩類、第四紀段丘堆積物、第四紀火山岩類の地質調査を行い、岩石・堆積物試料を採集するとともに、遺跡発掘予定地域とその周辺の地質学的関係を把握した。さらに、今回の調査結果を報告書としてまとめ、シリア考古庁に提出した。

(4) 海外の考古試料分析研究者との情報交換 (星野)

ゲッチンゲン大学の Wedepohl 教授とは、古代遺跡出土のガラス製品の分析法に関する情報交換を行った。また、ロンドン自然史博物館の Humphrey 博士とは、旧石器時代の環境変遷史の解析法に関する情報交換を行った。これにより、多くの有益な教示が得られた。

(5) 環境放射能測定試験 (田中)

本研究経費 (2005 年度) で購入した環境放射能測定器の測定試験を行い、地質・石材についてのフィールド情報が現場で得られることを確認した。私たちは常に自然界からの放射能を浴びている。その 1/3 は宇宙線によるもので、あとの 1/3 は周囲の岩石や土壤にふくまれる天然のウラン、トリウム、カリウムとそれらが放射壊変する途中に出現するラジウムやラドンによる。これまで取り上げられる事の少なかった“環境放射能”を指標の一つとしてビシュリ山系における自然環境の変遷を眺めてみようかと計画しているが、現地に持ち込むためにはシリア当局との交渉が大きな課題である。

(6) 蛍光 X 線分析試験 (星野)

同じく、本研究経費 (2006 年度) で購入した蛍光 X 線分析装置の測定試験を開始した。精度の高い分析結果を得るためには様々な分析試験が欠かせないが、これらもほぼ完了したので、手始めに下記 (7) の試料の分析に取り掛かる計画である。

(7) 現在進行中の研究

①西アジアのセム系遊牧部族の墓遺跡から藤井によって採集された堆積物の岩石学的・化学的研究、②同じく、西アジアのセム系遊牧部族の墓遺跡から藤井によって採集された炭質物の ^{14}C 年代測定、③イランとシリアの旧石器時代終末～新石器時代の遺跡から常木によって採集された炭質物の ^{14}C 年代測定、④第一次現地調査で採集した岩石・堆積物試料の岩石学的・化学的研究、および ^{14}C 年代測定が進行中である。

4. 「セム系部族社会の形成」研究への寄与

ビシュリ山系を含むアラビア半島北部の自然環境は、地質時代以来、地殻変動や地球規模での気候変動など様々な要因に支配されて変化を繰り返してきた。とくに、完新世中期以降の乾燥化傾向は、人間社会に少

なからぬ影響を与えたことは疑いない。

本研究は、ビシュリ山系における環境変遷史の構築と併せて、自然と人間との関わりを通時的に明らかにすることで「セム系部族社会の形成」研究に大きく寄与できる。

5. 2007年度以降の研究計画

< 2007 - 2008 年度 >

- (1) ビシュリ山系遺跡合同発掘調査に加わり、地質層序を詳細に観察・記載する。
- (2) 遺跡周辺の地質・地形調査を行い、地質・地形発達史を明らかにする。
- (3) 岩石・堆積物・土壌・炭質物試料を採集し、顕微鏡観察、化学分析、14C年代測定、花粉分析などの室内実験を行う。
- (4) 衛星画像・空中写真・地図情報を解析し、広域的な環境情報を抽出する。
- (5) 各年度の研究で得られた新知見を論文として公表する。
- (6) 領域全体の共同研究を推進するとともに、シンポジウム、研究発表会、出版物への執筆に積極的に参画する。

< 2009 年度 >

- (1) 必要に応じ、追加調査と室内実験を行う。
- (2) これまでの当研究班の成果をまとめ、論文・成果報告書として公表する。
- (3) 領域全体の成果の最終まとめに参画する。

6. 業績リスト

< 本研究に直接関わるもの：報告書 >

星野光雄, 砂漠砂から読み取る過去の自然環境. 「セム系部族社会の形成 ニューズレター」, No. 4, 12-16, 2006.

星野光雄・大沼克彦: シリア北東部、テル・タバノ遺跡産の礫に関する岩石学的研究. 「セム系部族社会の形成: 平成 17 年度研究報告」, 75-81, 2006.

中村俊夫・藤井純夫: 西アジア考古学遺跡発掘試料の放射性炭素年代測定. 「セム系部族社会の形成: 平成 17 年度研究報告」, 82-86, 2006.

田中 剛: セム系部族社会の形成に「環境学」を求めて. 「セム系部族社会の形成 ニューズレター」, No. 2, 22-24, 2006.

中村俊夫: ヨルダン南部アマン県のワディ・ルウエイシッド・エツ・シャルキ遺跡から採取されたダム関連遺物の放射性炭素年代測定の結果 (予報). 特定領域研究「セム系部族社会の形成」平成 18 年度研究報告, 2007. (印刷中)

Hoshino, M., Tanaka, T. and Nakamura, T.: Geological and Environmental Field Survey in the Bishri Region, Southeast of Raqqa - A Preliminary Report of the First Working Season - . 特定領域研究「セム系部族社会の形成」平成 18 年度研究報告, 2007. (印刷中)

< 本研究に関連するもの：報告・論文 >

Hoshino, M. (Ed): Soil erosion and conservation in Western Kenya. Report of the Research Project, No. (A) 15253006 (2003-2005) by the Grant-in-Aid for Scientific Research (Overseas Scientific Survey) from Japan Society for the Promotion of Science, 96 p., 2006.

Katsurada, Y., Hoshino, M., Yamamoto, K., Yoshida, H. and Sugitani, K.: Gully head retreat of Awach-

Kano gullies, Nyanza Province, Kenya: field measurement and pixel-based upslope catchment assessment. *African Study Monographs*, 2007. (in press)

齊藤 毅・市谷年弘：鳥取県人形峠層辰巳峠部層（上部中新統）の花粉群集と気候変動。「日本花粉学会会誌」, 2007. (印刷中)

計画研究 ユーフラテス河中流域とその周辺地域の 住民に見られる形質の時代的变化

石田英實（滋賀県立大学人間看護学部）

組織 研究代表者：石田英實（滋賀県立大学人間看護学部教授）

研究分担者：熊倉博雄（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

近藤 修（東京大学大学院理学系研究科准教授）

荻原直道（京都大学大学院理学研究科助教）

中野義彦（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）

1. 研究の目的

アッシリアやバビロンなど、西アジア古代王国の創建集団であるセム系民族の一大原郷がシリア北東部ユーフラテス河中流域のビシュリ山系であったと考えられているが、この形質人類学的な研究プロジェクトでは、そのような見解が住民の形質的特性の分析から支持されるか、否かを検討する。そのためには、まずBC2-3000年紀を中心にこのビシュリ山系を生活圏とした人々の形質的特徴を、同時代に生きたメソポタミアを含む西アジア地域住民のそれと比較することで浮き彫りにすることが必要である。この知見を踏まえてビシュリ山系の住民と西アジア地域の住民の形質変異を地理的、時代的に分析することで、西アジア古代王国の創建集団セム系民族の一大原郷がビシュリ山系であったとする見解や、BC2-3000年紀ビシュリ山系住民の拡散様式を検討し、セム系民族の形成研究に貢献する。

2. 研究の方法

研究対象としては、BC2-3000年紀を中心にした古人骨が中心であり、これらはビシュリ山系で発掘される古人骨標本と、メソポタミアを中心とした西アジアからの古人骨標本である。

前者の古人骨は今後の発掘によらねばならないが、後者の古人骨はこれまでに発掘された標本を用いる。メソポタミアを含む西アジアの形質人類学的な調査は、20世紀前半より欧米の研究者により行われ、発掘された古人骨標本は各調査隊が自国に持ち帰り、大学や博物館などに収められている。しかし、残念ながら発掘以来長い時間が経過しているために、当時の資料や標本そのものが散逸し、所蔵情報が正確さを欠くようになったケースも多い。そこで欧米の研究機関における古人骨の所蔵状況を現地調査し、簡潔なカタログの作成を行い、その上で古人骨の形態分析を行う必要がある。

一方、日本隊によるメソポタミア地域での発掘調査は1950年代に始まるが、1970代からはイラク・ハムリン地域での発掘調査により大量の古人骨が収集され、約600体に達しており、これらは京都大学自然人類学研究室に整理の上、保管されており、世界最大級のコレクションとなっている。しかし、カタログが作成されていないため、その作成が必要である。

上のように、本研究で用いる発掘済みの資料としては、欧米に散在するBC2-3000年紀周辺の古人骨標本と、京都大学に保管されているイラク、ハムリン地域からの古人骨であり、カタログ作成の上、分析に使用する。

標本の分析方法としては、CTスキャンを行った上で、3次元構築をなし、その3次元画像を基に形状解

析を行うことを基本とする。従って、ここでは既存の臨床用CTスキャナー（X線ヘリカルCTスキャナ TSX-002/4I(XVision：東芝メディカル社製、京都大学自然人類学研究室蔵）を用いるほか、運搬可能な小型CTスキャナー（pQCT+：ストラテック社製）を導入して現地でのスキャンを行う。また、計算機による計測と分析方法を開発し、これまでに不可能であった骨格の内部構造の形態分析を非破壊で行う。

3. 2005 - 2006 年度の成果

これまでに行ったことは2つに大別できる。一つは古人骨調査とカタログ作成であり、他の一つはCTによる3次元データの収集と計測と分析方法の開発である。

古人骨調査とカタログ作成では、京都大学自然人類学研究室所蔵の標本と欧米、とくに合衆国ペンシルベニア大学の標本についてである。

i: 古人骨調査とカタログ作成

京都大学自然人類学研究室に所蔵されているメソポタミア関連の古人骨資料とは、1970年代に始まった国士舘土舘大学イラク古代文化研究所所長藤井秀夫教授を代表とするイラク、ハムリン盆地調査に参加した石田らが持ち帰った古人骨標本であり、約600体を数える。これはメソポタミア関連の世界最大級のコレクションであり、イラク中部のHimirin遺跡群（Tell Songor, Tell Gubbahなどのテル群）、イラク西部のSur Jur'eh, Glei'eh、イラク北部のAshul、イラク中南部のBabylonなどから発掘されている。発掘遺跡の年代は多様であり、最も古い人骨がウバイド期のもので27体、ジュムデット・ナスル期の22体、古バビロニア、イシン・ラルサ期の52体、カッシート期の8体、新バビロニア期の1体、新アッシリア期の31体、新アッシリア期以降の1体、アケメネス期の1体、パルティア期の22体、ササン期の1体などが含まれている。この標本のカタログを作成し、刊行した（石田英實、萩原直道、巻島美幸（2006）、京都大学自然人類学研究室所蔵イラク古人骨標本カタログ、350頁、金星社・京都）。

欧米に散在する西アジア関連の古人骨調査は合衆国を中心に行い、その所蔵が確認されたのは、ハーバード大学ピーボディ博物館（マサチューセッツ州、ケンブリッジ）、ペンシルバニア大学考古人類学博物館（ペンシルバニア州、フィラデルフィア）、フィールド博物館（イリノイ州、シカゴ）、シカゴ大学東洋研究所（イリノイ州、シカゴ）およびミシガン大学ケルシー考古学博物館（ミシガン州、アナーバー）の5箇所であった。この内シカゴ大学東洋研究所とミシガン大学ケルシー考古学博物館には詳細なデータベースが整備・管理されており、リクエストによりデータの提供が受けられる。

フィールド博物館ではMuseum Numberと発掘番号との対応が不完全であり、現在、博物館ではデータベース化に向け、調査中である。博物館はX線CTの購入を予定しているが、古人骨に使用するか否かは不明である。標本はKish（3000BC-AD650）の頭蓋骨と体幹肢骨多数、Baghdad出土の頭蓋骨16個体、An Najaf出土の頭蓋骨2個体、Karbala出土の頭蓋骨2個体が所蔵されており、保存状態はおおむね良好であった。

ペンシルバニア大学考古人類学博物館では所蔵品情報の電子化を行っており、X線CTによる頭蓋骨スキャンの計画がある。標本はNippur（900-500BC）出土の頭蓋骨6点、Tepe Hissar（イラン、4000BC-AD800）の頭蓋骨と体幹肢骨が多数、Hasanlu（イラン、1450-750BC）の頭蓋骨と体幹肢骨が多数所蔵されている。

ハーバード大学ピーボディ博物館では現存する標本とデータについて極めてよく整理されている。ただし、X線CTによる頭蓋骨のデジタル化の予定は無い。標本はNuzi（Yorgan Tepe, near Kirkuk：紀元前3世紀前

半)の頭蓋骨と体幹肢骨(最小個体数は28個)、Tureng Tepe(イラン)の頭蓋骨と体幹肢骨(最小個体数は21個体)、Tepe Yahya(イラン)の頭蓋断片と体幹肢骨断片(最小個体数は7個体)、その他イラン出土人骨少々保存されていた。

上記の調査状況は、平崎鋭矢、熊倉博雄、石田英實が「アメリカ合衆国におけるメソポタミア及び周辺地域古人骨所蔵状況」と題して大阪大学人間科学部で印刷した(130頁、2007年)。

ii: CTによる3次元データの収集と計測と分析方法の開発

臨床用CTスキャナによる3次元デジタル画像の構築と、それを用いた計測と解析方法の開発について以下に述べる。

京都大学イラク古人骨コレクションの頭蓋骨を撮影し、そのデジタル化を進めてきた。撮影条件は、管電圧120kV、管電流100mA、スライス厚2mmとした。得られた高解像度断層像(ピクセルサイズ0.5mm、断層画像間隔0.5mm)から、医用画像処理ソフトウェア(Analyze 5.0)により骨領域を抽出し、その三次元形状を可視化した。さらにこの表面を微小三角形(ポリゴン)のパッチデータに変換し、標本の三次元立体モデルを構築した。現在のところ、38個体の頭蓋骨のデジタル化を完了した。そのうち12個体については、インターネット上で公開している(http://anthro-db.zool.kyoto-u.ac.jp/iraq_db/)。こうしたデジタルデータの構築・整備は、メソポタミア古人骨研究の基盤を整備する上できわめて重要であり、今後も標本のデジタル化とそのデータの公開を進めていく予定である。

計算機による骨格の計測と分析方法の開発は頭蓋骨について行った。従来は距離や角度といったスカラー変量を計測し、多変量解析などの手法を適応することによって行われてきた。この方法では三次元的な解析には限界があり、形態的特徴を完全に捉え、比較することは困難であった。近年の三次元計測器の発達に伴い、形態的特徴を解剖学的特徴点の座標の集合体として捉え、座標成分をそのまま主成分分析することにより形態変異の傾向を抽出する方法(数理形態分析)が広く用いられるようになってきた。X線CTデータによるポリゴンメッシュの三次元立体バーチャル標本は、統一座標系に乗せられているため、解剖学的特徴点の抽出が容易であり、こうした数理形態解析にかけるのに適している。

そこでイスラム期の頭蓋骨3個体(標本番号IR44, 45, 49)について、頭蓋形態変異の予備的な分析を行った。構築した頭蓋骨の立体モデルを三次元処理ソフトウェア(Rapid Form2004)に読み込み、計34点の解剖学的特徴点について三次元座標を計測した。それらの座標値を三次元数理形態学ソフトウェアMorphologikaに入力し、形態変異の主成分を算出した。

3個体は主成分1で明瞭に2つのグループに分けられた。主成分1は頭の長さとの負の相関を、頬骨弓の高さ、鼻部の高さ、眼窩の高さと正の相関がある。IR44とIR49の頭蓋骨は互いに類似しており、主成分1で負の領域(それぞれ-0.02、-0.04)に位置するのに対して、IR45はそれらと異なる形質を示し、正の領域(0.065)に位置している。即ちIR44とIR49は相対的に長頭で頬骨弓の位置が低く、鼻が短く、目が細いという特徴をもち、逆にIR45は短頭で頬骨弓の位置が高く、鼻が長く、目が大きいという特徴をもつことを認めた。このように、解剖学的特徴点の座標値を主成分分析することにより、集団内の形態的変異を詳細に分析することができ、今後の骨格、ことに頭蓋形態の時代的、地理的変異の分析への見通しをもった(荻原直道、巻島美幸、石田英實(特定領域研究「セム系部族社会の形成」News Letter No. 4, Dec.2006)。

4. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか

目的のところでも述べたように、形質の比較分析を通してセム系部族の拡散様式を知り、その結果をその部

族社会の形成研究に役立てることである。具体的には BC2 - 3000 年紀にビシュリ山系を生活圏とした人々の形質的な諸特徴を明らかにし、それらの諸特徴がメソポタミアを含む西アジアに住む人々の間にどのように分布するのか、また、時代的にその分布はどのように変化するのかを分析する。その分析結果はセム系部族の拡散様式をある程度反映したものと考えられ、部族社会の形成研究に貢献できるものと考えている。

5. 今後の研究

これまでは主として既発掘の古人骨標本の収蔵や保管状況について調査に重点をおいてきたが、今後は CT スキャナを用いた標本の 3 次元デジタルデータの収集に重点を移す。この際、中心となる標本は京都大学イラク古人骨コレクションであるが、他にフィールド博物館、ペンシルバニア大学考古人類学博物館を始めとする合衆国などの合衆国の研究機関、また欧州、中近東の博物館に所蔵される標本について 3 次元デジタルデータの収集を行う。さらに、それらを基にして 3 次元構築した骨格の計測を行い、デジタル化データの統計処理に移る。

ビシュリ山系での発掘が今夏から開始され、新しい発掘人骨の収集が見込まれる。それらの標本がある程度まとまったところで、CT 装置をダマスカスの博物館に移送し、先述した京大コレクションや合衆国などコレクションと同様な方法で計測し、統計処理などにより形質の特徴を抽出したい。最終的には、それらの諸特徴についてビシュリ山系と他の西アジアでの時代別分布の様式を明らかにし、形質の拡散様式を検討することによって、セム系部族社会の形成研究に貢献したい。

計画研究 「シュメール文字文明」の成立と展開

前川和也 (国士舘大学 21 世紀アジア学部)

研究代表者：前川和也 (国士舘大学 21 世紀アジア学部教授)

研究分担者：前田 徹 (早稲田大学文学学術院教授)

依田 泉 (常磐大学国際学部教授)

森 若葉 (総合地球環境学研究所上級研究員)

研究協力者：川崎康司 (早稲田大学文学部非常勤講師)

堀岡晴美 (国士舘大学グローバルアジア研究科博士課程)

ハイダル・ウレビ (国士舘大学グローバルアジア研究科修士課程)

1. 研究の目的

計画研究「シュメール文字」文明の成立と展開は、主として前3千年紀、南部メソポタミアと北部メソポタミア、さらにエウフラテス流域シリア地方でも、共通の文字記録システム（シュメール楔形文字サインを用いる粘土板記録）が用いられたという事実を大前提として、これらの地域でどのような国家・行政システムが作りあげられたのか、どのような文化、どのようなイデオロギーが展開したのか、そしてそれは文字記録にどのように表現されたのかを考察しようとするものである。

研究班は以下のメンバーによって構成されている。

前川和也 (研究代表者 国士舘大学 21 世紀アジア学部教授)、前田徹 (早稲田大学文学学術院教授)、依田泉 (常磐大学国際学部教授)、森若葉 (総合地球環境学研究所上級研究員)。そのほかに、川崎康司 (早稲田大学文学部非常勤講師)、堀岡晴美 (国士舘大学グローバルアジア研究科博士課程)、ハイダル・ウレビ (国士舘大学グローバルアジア研究科修士課程) が研究協力者として、研究班のために活動している。

粘土板を用いる文字記録システムは、前4千年紀末メソポタミアの最南部シュメール地方のウルクにおいて成立するが、つづく前3千年紀のごく早い時期までには北メソポタミア各地やエウフラテス・シリア地方に伝えられたかもしれない。ちょうどその頃、各地で都市王権が成立しつつあった。各地の王権、各地の社会は、文字記録システムを必要としたはずである。

各地の王権の性格、各地の社会構造、文化伝統は、おおきくちがっていたであろう。にもかかわらず同一の文字記録システムが各地で用いられ続けるならば、そこにどのような齟齬、矛盾が生まれるか。また各地の政治組織の相互関係が深まり、あるいは政治組織が統一されたとき、それぞれの文字記録システムはどのように変質していくのか。あるいは、南部メソポタミア文字記録にみえる文化伝統を、北部メソポタミアやユーフラテス中流域の人々はどのように理解しようとしたのか。われわれは「漢字文化（文明）圏」に触発されて「シュメール文字文明」という概念を作りあげたのであるが、われわれ東アジア世界に住む人間は、ある文字記録システムのもとで、共通する特質をもちつつも多様な政治、社会、文化システムが形成・展開されるさまを熟知している。ほぼおなじような現象を、われわれは古代西アジアにみようというのである。

したがってわれわれは、この研究において、南部メソポタミア、あるいはシュメール地方で出土する文字記録の世界、前3千年紀の世界だけに考察を限定していない。できうるかぎりわれわれは、シュメール世界をこえ、あるいは南部メソポタミアをこえるレヴェルの政治組織や文化をも、考察の対象としている。また、南部メソポタミアと北部メソポタミア、シリアとのあいだの交易、文化交流、言語接触をも考察する。

たとえばシュメール文字記録システムを、まったくことなる言語を話すアッカド人やアムル人が採用したとき、いったいなにがおこったのか。

II. 研究の方法

前4千年紀末ちかく、Eanna IVa層のウルクにおいて粘土板記録システムが成立する。続くEanna III層時代(Jemdet Nasr期)には、このシステムがシュメール・アッカド全地域にひろがるのみならず、ディヤラ地域にまで普及していた証拠がある。さらに前3千年紀のごく早期に、メソポタミア北部や西方シリア地域にも粘土板記録システムが伝播したことを示す考古学的証拠が、ちかい将来出現したとしても、われわれはけっしておどろくことはないであろう。

前25世紀から24世紀にかけては、各地に族生した都市行政組織は、共通の粘土板記録システムを本格的に用いていた。われわれのいう「シュメール文字」文明世界が本格的に成立しているのである。そのためには、エブラ、テル・ベイダル、マリから出土した大量の粘土板文書を、ほぼ同時代のシュメール粘土板文書と対比すればよい。

したがってわれわれがまず採用したのは、25、24世紀の各地から出土する辞書リスト、行政文書の内容の比較検討作業である。前川和也および森若葉が、これらの作業を歴史的、言語学的なアプローチにもとづいて実施している。またこれには、研究協力者の堀岡晴美の協力をも得ている(堀岡晴美は、前3千年紀中葉のシュメール中部ファラから出土した文書の、わが国唯一の専門家である)。これにもとづいて、各地の書記教育と文書行政の実態、当時のシュメール語とセム諸語の復元、さらにいうまでもなく、当時の社会の復元が行われる。とりわけエブラからは「(シュメール語)辞書リスト」だけでなく、史上もっとも古い対訳(シュメール語・エブラ語)辞書テキストが出土していて、これらが本格的に利用されれば、セム語の初期の歴史について、もっとも重要な知見を得ることができるはずである。

いっぽう、前田徹、依田泉および前川和也は、前3千年紀の文書だけでなく、前2千年紀前半の記録をも利用しつつ、主として「シュメール文字」文明世界の政治イデオロギーの分析や、空間的に拡大した国家、行政組織の分析を行なっている。この作業には、研究協力者川崎康司も加わっている。

なお本研究班メンバーは、ほんらい粘土板文献の解読を専門職としているから、さしあたっては、考古学調査、発掘よりも、出土粘土板についての文献学アプローチを重視していく。

III. 2005-2006年度の成果

III.1. 研究会

われわれは各自の研究を実施しつつも、年1ないし2回の共同研究会を実施し、班員の報告、相互討論を実施している。これまで実施された研究会および報告内容は以下のとおりである。なお第4回研究会は、2007年5月末早稲田大学において開催される(第50回シュメール研究会をかねる)。

第1回 [2005年12月23日、京大会館]

1. 「メソポタミア・シリアの一体化：イエロバおよびペルシアノロバをめぐる」 前川和也 (研究代表者 国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員)
2. 「キシユとウルク」前田徹 (研究分担者 早稲田大学文学学術院)
3. シュメール語とアッカド語のš音とs音 森若葉 (研究分担者 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター研究科外研究員)
4. 「戦いの王(サルゴン英雄叙事詩)」の成立の背景とサルゴン1世 川崎康司 (研究協力者 早稲田大学文学部非常勤講師)

5. 「時代区分名称「ファラ期」を見直す」堀岡晴美 (研究協力者)

1. The ass and the onager in Mesopotamia and Syria (Maekawa); 2. Kish and Uruk (Maeda); 3. /š/ and /s/ in Sumerian and Akkadian (Mori); 4. Formation of the Sargon Epic Tale (Kawasaki); 5. On the term “Fara period” (Horioka).

第2回 [2006年3月25、26日 (第49回シュメール研究会をかねる)、京大会館]

1. 「アッシュルバニパルの浮彫りにおける物語絵画の様式について」 渡辺千香子 (大阪学院短期大学)
2. 「Lugalanda時代のe2-mi2組織と小家畜飼育」 山本茂
3. 「シュメール語動詞sug「立つ〔複数〕」について」 森若葉 (研究分担者 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター研究科外研究員)
4. 「ウル王室墓地のエジプト系文物」 小野山節
5. 「2005年テル・タバンの出土中期アッシリア行政文書」 柴田大輔
6. 「再考：エシュヌナ王国の独立と王権理念の確立について」 川崎康司 (研究協力者 早稲田大学文学部非常勤講師)
7. 「シュルギ王の「Gu2-edin-na プロジェクト」」 前川和也 (研究代表者 国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員)
8. 「ウルカギナの「改革」と行政経済文書」 田中祐介 (京都大学文学研究科博士後期課程)
9. 「なぜその書記は2言語で書かなければならなかったか」 高井啓介
10. 「ウンマにおける「王の供犠nig2-giš-tag-ga lugal」」 前田徹 (研究分担者 早稲田大学文学学術院)
11. 「ファラ文書にみられる「奉納団」」 堀岡晴美 (研究協力者)

1. Narrative representation in the relief of Assur-banipal (Watanabe); 2. Raising of sheep and goats in the e2-mi2 in the years of Lugalanda (Yamamoto); 3. On the Sumerian “plural verb” sug (“to stand”) (Mori); 4. The Egyptian influence as observed on the finds of the Ur Royal Tombs (Onoyama); 5. The Middle-Assyrian administrative tablets unearthed in the 2005 excavation of Tell Taban, Syria (Shibata); 6. Formation of the Kingdom of Eshnunna (Kawasaki); 7. The “Gu2-edin-na development project” of King Šulgi (Maekawa); 8. Administrative documents in the “Reforms of Urukagina” (Tanaka); 9. Why did the Mari scribe write it in Sumerian and Akkadian? (Takai); 10. The sacrificial rite nig2-giš-tag-la lugal in Ur III Umma (Maeda); 7. Pilgrim groups in the Fara documents (Horioka).

第3回 [2007年1月14日 京大会館]

1. 「長さの単位、面積の単位、穀物容量の単位 前川和也」 (研究代表者 国士舘大学21世紀アジア学部)
2. 「「行く」を意味するシュメール語複数語基」 森若葉 (研究分担者 総合地球環境学研究所)
3. 「Umm al-Aqarib 発掘報告 (WS 198, cf. WS 197 [Jokha])」 ハイダル・ウレビ (研究協力者 国士舘大学グローバルアジア研究科修士課程)
4. 「古バビロニア期以前のエンキ神と abzu：シュメール語資料を中心に」 辻田明子 (京都大学文学研究科博士前期課程)
5. 「メソポタミアにおける刑罰としての死」 依田泉 (研究分担者 常磐大学国際学部)
6. 「ファラ文書にみられる多重性」 堀岡晴美 (研究協力者 国士舘大学グローバルアジア研究科博士課程)
7. 「蛮族侵入史観再考：蛮族侵入史観の成立時期」 前田徹 (研究分担者 早稲田大学文学学術院)

1. The Sumerian linear measure, square measure, and the capacity measure (Maekawa); 2. “Plural verbs <to go>” in Sumerian (Mori); 3. Excavation of Umm al-Aqarib (Haidal-Urebi); 4. Enki and the Abzu in Sumerian texts (Tsuzita); 5. Capital punishment in Mesopotamia (Yoda); 6. Complexity as seen in the Fara documentation (Horioka).

講演・学会発表

- 2005 前田徹「シュメール語王碑文、年名、王讃歌」第47回日本オリエント学会（九州大学）
 2006 Kazuya Maekawa, Salinization in Sumerian Agriculture. *Symposium: Sali-Graphy* (国際地球環境学研究所)

III .2. 研究班員による成果刊行

前川和也 Kazuya Maekawa

- 2005 「シュメールにおける都市国家と領域国家：耕地と水路の管理をめぐる」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』学生社。
 2006a 「マルトゥの結婚によせて」『文部科学省科学研究費補助金：特定領域研究：セム系部族社会の研究 Newsletter No.3』。
 2006b 「前3千年紀メソポタミアのイエロバとノロバ：再考」『西アジア考古学』7号。
 2006c 「メソポタミア・シリアの一体化：イエロバおよびペルシアノロバをめぐる」『セム系部族社会の形成平成17年度研究報告：特定領域研究 研究領域番号124』。
 2007 「初期メソポタミアにおける領域国家の土地政策：空間の拡大」前川和也(編)『空間と移動の社会史』ミネルヴァ書房（印刷中）。

前田 徹

- 2006a 「ウル第3王朝時代ウンマにおける王のサギ」『早稲田大学文学研究科紀要』第50輯第4分冊。
 2006b 『シュメールにおける統一王権と都市支配者：平成17年度科学研究費補助金（基盤研究C一般）課題番号15520460』。
 2006c 「キシユとウルク」『セム系部族社会の形成平成17年度研究報告：特定領域研究 研究領域番号124』。
 2005 Royal Inscriptions of Lugalzagesi and Sargon, *Oriente* 40.
 2007 Expressions of humility in Early Dynastic royal inscriptions, *Acta Sumerologica* 23 (in press).

依田 泉

- 2006 「日本、アメリカそしてイスラーム：思想・文化と社会の『三角関係』」波多野勝編『日米文化交渉の歴史：彼らが変わえたものと残したもの』学陽書房。

森 若葉

- 2005 「楔形文字で日本語を書く1、2」『月刊民博』10、11月号。
 2006 「シュメール語動詞 sug「立つ〔複数〕」について」『セム系部族社会の形成 平成17年度研究報告：特定領域研究 研究領域番号124』。
 2007a ベルウッド {佐藤洋一郎監訳}『ファースト・ファーマー』（9、10章訳）京都大学学術出版会（印刷中）。
 2007b 「シュメール語」池田潤（編）『古代オリエント文献案内』第3巻（言語・文字編）（近刊）。
 2007c Plural verbal bases meaning “to go” in Sumerian, *Acta Sumerologica* 23 (in press).

Books and Articles (in Japanese unless noted)

Maekawa

- 2005 Changing patterns of the hydraulic management in the Sumerian city-states and the regional state.
- 2006a Towards a better understanding of the “Marriage of Martu”.
- 2006b The donkey and the Persian onager in late third millennium B.C. Mesopotamia and Syria: A rethinking.
- 2006c The donkey and the Persian onager in Mesopotamia and Syria.
- 2007 (in press) Agrarian policies of the regional kingdoms in early Mesopotamia.

Maeda

- 2006a The royal “cup-bearers” (sagi-lugal) in Ur III Umma.
- 2006b *City states and the regional states in early Mesopotamia*.
- 2006c Kish and Uruk.
- 2005 Royal inscriptions of Lugalzagesi and Sargon (in English).
- 2007 (in press) Expressions of humility in Early Dynastic royal inscriptions (in English).

Yoda

- 2006 Japan, the United States and the Islamic world.

Mori

- 2005 How to use cuneiform signs in the writing of Japanese, 1, 2.
- 2006 The Sumerian “plural verb” sug (“to stand”).
- 2007 Bellwood, *The First Farmer* (Jap. transl. Chapters 9, 10).
- 2007 The Sumerian language.
- 2007 (in press) Plural verbal bases meaning “to go” in Sumerian (in English).

III .3 ここでは、前川和也および前田徹の成果を紹介しておく。

III .3.1 Maekawa, *The donkey and the Persian onager*

前川 2006b; 2006c の結論は、次のように要約できる。1) 前3千年紀後半メソポタミア、シリア諸地域でイエロバを指示する語として、(ANŠE.)IGI (エブラ、テル・ベイダル)、(ANŠE.)SIG₇ (シュメール中北部: シュルツパク、ニップル)、(ANŠE.)DUN.GI (シュメール南部: ウル、ラガシュ) (以上シュメール都市国家時代)、(ANŠE.)LIBIR(IGI+ŠE₃) (アッカド時代、ウル第3王朝時代: メソポタミア、シリア、スサなど全域)が用いられていたが、それらのスメログラムはすべて /si(g)/ /se(g)/ ないしは /še(g)/ という音価をもっていたはずであり、またすべて「黄褐色 (の<ロバ>)」を意味していた。2) 前3千年紀、ウマが本格的に利用される以前のメソポタミアやシリアでは、(ANŠE.)BAR.AN (=kunga) と呼称される動物が<戦車>をひいていた。これまでこの動物は、イエロバと (シリア・) オナゲルの交雑種と解釈されてきたが、前川はこれをペルシア・オナゲルと結論した。前3千年紀には、この動物はディヤラ流域地方、北メソポタミアやイランからすこぶる高値で、南部メソポタミアやシリア諸都市 (エブラ、マリ) に輸出されていた。ナガル (テル・ブラク) およびデール、エシュヌナ (ともにディヤラ流域) が輸出のための中心都市であった。

この仕事は、最新の情報にもとづいて前3千年紀後半のウマ科動物の呼称を統合的に理解しようとする、はじめての試みであり、また (ANŠE.)BAR.AN をイエロバと (シリア・) オナゲルの交雑種とする通説にたいしての、はじめての深刻な反論であった。またここで論じられたトピックは、スメログラムを駆使する行政文書がいかにか広くメソポタミア、シリア各地で利用されていたか、また用いられるサインが各地で微妙に

異なっても、表現テクニクニクは基本的には同一であったことを、じつに雄弁に示している。同時に、前3千年紀後半には「シュメール文字」文明」世界で<交通>システムが確立していたことをも示している。前川は、この仕事を、「シュメール文字文明」の成立と展開」研究グループの研究成果として公刊できたことを幸いにおもう。

なお最近、前3千年紀後半の遺跡 Umm al-Marra (エブラ東方) から数10頭のウマ科動物のほぼ完全な骨体が出土したことを、ここでつけくわえておかなければならない。出土動物骨分析の責任者 Jill Weber は、これらを (ANŠE.)BAR.AN(= kunga) の骨体であると理解している。彼女は、これらがイエロバとペルシア・オナゲルの交雑種であると考えており、さらにこれらは、もともと東方(ナガル)からエブラに輸入されたのであり、それらがのちに Umm al-Marra に到来したと考えているのである。いぜんとして彼女は、これらの動物が交雑種であるという考えに依っているが、もはや彼女は、交雑種をつくるために、地域に生息するシリア・オナゲルが利用されたとは考えていない。この動物によって、ナガル(テル・ブラク)領域とエブラ地域が連結されたと考える点では、彼女は前川と同じ立場にたっているのである。いずれにせよ、Umm al-Marra の発掘は、前川論文とともに、前3千年紀のウマ科動物の同定について、決定的に重要な役割をはたすであろう。またここではじめて、文献学と動物考古学の知見が交流することになる。

III .3.2 Maeda, Formation of the early Mesopotamian ideology of the “invasion of barbarians”

前3千年紀後半の南部メソポタミアでは、初期王朝期末からアッカド王朝期にかけて、王権の支配領域が拡大するにともない、あらたな支配イデオロギーが創出される。また前2千年紀はじめには、シュメール人の国家・社会の終焉を説明するあらたな政治思想が成立する。これらの問題は、前田徹によって精力的に論じられた、じっさい前田の業績は、前3千年紀から2千年紀にかけての政治イデオロギーにかんする、世界の学界でももっとも先端的な仕事であると評価してよい。

たとえば前田は、2006年12月に実施されたわれわれの研究会での報告(「蛮族侵入史観再考：蛮族侵入史観の成立時期」：平成18年度研究報告にて公刊予定)において、ウル第3王朝版「シュメール王名表」のあらたな読解を提示して、「東方の蛮族グティウム」という概念は、ウル第3王朝後半あるいはそれ以後になって創作された概念であることを鮮やかに論証した。

前田は、さいきん公表されたウル第三王朝版「シュメール王名表」の末尾近くをつぎのように読む。「ウルクは武器で打たれ、王権は軍団に移った。軍団は、王(の存在)を知らなかった。彼ら自身で、3年(王権を)分有した。(中略)。[破損]。ティリガン。40日統治。アダブは武器で打たれ、王権はウルクに移った。ウルクにおいてウトウヘガルが7年統治。」通説的理解では、アッカド王朝後期にいたって東方からグティウムが侵入し、大混乱がもたらされるが、これをウルク王ウトウヘガルが克服し、ついでウル第3王朝が誕生するという。後代の「シュメール王朝表」はこのような理解に立って、シュメール領域国家誕生が想定されているし、またウトウヘガルによるグティウム王ティリガンの制圧を具体的に描いた作品ものこっているのである。けれどもウル第3王朝版「シュメール王名表」は、ティリガンをシュメール都市のひとつアダブの王とみなしているのである。また後代の「シュメール王朝表」では「グティの国の軍団」とあるけれども、ウル第3王朝版では「軍団」と書かれるのみであって、グティウムという「蛮族」にはまったく言及されていない。

たしかにウトウヘガルはアダブを支配していたティリガンを破ったのであろう。しかしそれは、ウトウヘガルのおおくの軍事行動のひとつであって、それ以上のものではなかったのである。なによりも、グティウムのティリガンがアダブ王となったこと自体を、ウル第3王朝版「シュメール王名表」は、問題視していないのである。ところが後代のテキストでは、ウトウヘガルは、「山の蛇」であり、「(シュメールの)神々に

暴力を振るい、「シュメールの王権を異国に持ち去った」グティウムのティリガンを倒したとされる。のちなって「蛮族グティウム」、「シュメールの解放者ウトウヘガル」という新イデオロギーが創出されたのである。ふるく 1939 年に、ヤコブセンによって、アッカド王朝とシュメール諸都市の衝突は、「人種的」、民族的な対立の結果なのではなく、政治的な抗争として理解されるべきであるという画期的論文が書かれた。さらに約 70 年後前田は、シュメール、アッカド外の支配者がシュメールやアッカドの都市王となっても、同時代人はとりたてて批難していなかったという重大な結論に到達したのである。

IV. 2007 年度以降の計画

IV.1 すでに述べたように、前 3 千年紀後半には、メソポタミアからシリア地方にかけて「シュメール文字」文明」世界が確立していた。そのことは、近年の考古学発掘でもますます確認されつつある。1990 年代中葉になって発見されたテル・ベイダル文書は、そのよい例である。すでに前川は、ウマ科動物の議論を行なうにあたって、テル・ベイダル文書を広範に利用している。

「シュメール文字」文明」世界の各地で、書記は共通の教材を用いて「シュメール語彙」を学んでいた。完全に同一内容の「(シュメール語) 辞書リスト」Lexical Lists が各地で発見されているという事実に、このことがもっとも雄弁に示されている。最近の発掘でも「(シュメール語) 辞書リスト」の発見がつついでいるのである。Early Dynastic Lu A とよばれる官職リストが、さいきんテル・ブラクで発見された (P. Michalowski, An Early Dynastic tablet of ED Lu A from Tell Brak (Nagar), *Cuneiform Digital Library Journal* 2003)。このリストは、Eanna IVa 層のウルクで成立していらいメソポタミア南部各地で前 2 千年紀はじめまで書かれ続けていて、行政組織の書記養成にとってもっとも重視された文書だったとおもわれるが、これまでシュメール外では、スサ（アッカド期）およびエブラ（前 3 千年紀中葉）で発見されていただけである。いっぽう官職リスト Early Dynastic Lu E は、おそらく前 3 千年紀後半の中・北部シュメールで成立したとおもわれる。この写しはすでにシュルツパク、エブラ、ガスル（キルクク近郊）などで発見されているが、さいきんウル・ケシュでも出土した (G. Buccellati, A Lu E school tablet from the Service Quarter of the Royal Palace at Urkesh, *Journal of Cuneiform Studies* 55, 2003)。ブチェラティによれば、ウル・ケシュはフリ人世界のフロンティアに位置していた。このような、シュメールにとってもっとも＜辺境＞に位置するセトゥルメントでも、書記は「(シュメール語) 語彙リスト」を教材として利用していたのである。

われわれは、前 3 千年紀後半にかんしていえば、文書行政システムをもっていたセトゥルメントでは、書記はかならずシュメール起原の「(シュメール語) 語彙リスト」を用いていたと結論してよい。シリアでの発掘がさらに進展すれば（もちろん、今後われわれが本特定研究において発掘する遺跡を含めて）、「(シュメール語) 語彙リスト」を含む大量の行政文書が出現する可能性がある。われわれは、その成果をまちたいとおもう。

IV.2 本研究においては、前 3 千年紀、2 千年紀のシュメール語、アッカド語の相互交渉に関してまだ研究が不十分である。エブラ文書以外にも、前 3 千年紀末のアッカド語史料が増加しつつあり、この分野の研究に本格的にとりくみたい。

また、「シュメール文字」文明」世界内での＜交通＞についても、研究を進めたい。すでにエブラ文書を主材料として、エブラとマリ、エブラとナガルなどが、政治的、経済的に密接に関連していた事実が判明している。いっぽうで、南部メソポタミア世界でも諸都市がたがいに連結していたことが、いまや明らかになりつつある。研究協力者堀岡晴美は、前 25 世紀にはシュルツパク（ファラ）を結節点として、南部のシュメール諸都市とシュメール北部、アッカド地方が協同活動を行っていたことを証明しつつあるのである。そしてこのような＜交通＞システムは、さらに西方シリアへも延びていたのではあるまいか。

計画研究 古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究

岡田保良（国土舘大学イラク古代文化研究所）

1. 研究組織

研究代表者 岡田保良・国土舘大学イラク古代文化研究所・教授

研究分担者 深見奈緒子・国土舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員

新井勇治・愛知産業大学造形学部・准教授

山内和也・東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・地域環境研究室長

辻村純代・国土舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員

2. 研究の目的

ビシュリ山系を根城とするセム系集団が保有していた建築術、とくに石材や煉瓦を積んで建物を造る「組積造」と総称する建築構法を中心に、隣接地域も含めて比較の手法からその独自性を明らかにする。

3. 研究の方法

対象地域として広くイラン西部から地中海東沿岸に至る西アジア一帯を、歴史的には遠く先史の時代から諸文明の時代を経てイスラームの文化が浸透するまでを想定する。組積造の建築といっても、普通に見られる日乾煉瓦造の古民家などでは屋根を草木や泥で葺くことが多い。煉瓦や石材で屋根まで造るには、相応の技術や経験を必要とする。それだけに、ドーム（円蓋）やヴォールト（穹窿）といった頭上に架かる曲面をなす組積構造には、地域や集団が古来受け継いできた技術上の伝統が、よく反映するにちがいない、比較観察の中心に据える。

4. 2005-2006 年度の成果

2005 年度：

- (1) 岡田がヨルダンのローマ時代遺跡ウム・カイス（古代名ガダラ）の地下墓所にある、セム系民族の石造建築におけるユニークなドーム組積に注目し、その技術系譜上の意義を訴えた。
- (2) 岡田、深見、新井の3名、17年12月から18年1月にかけて、レバノンの主要遺跡の踏査を実施。フェニキア時代以降の建築における組積技術、とくにローマ文化圏の切石造組積に顕著な地域性と先進性を認め、さらにビザンティン時代から初期イスラーム時代にかけての石造建築術に継承されることを確認した。

2006 年度：

- (1) 2006年7月-8月、前年度の観点を受け継ぎ、ヨルダンの主要遺跡の踏査を実施。ヘレニズム-ローマ・ビザンツ期を中心に約40箇所の建築遺跡を観察調査した。なかでも岡田はとくにヘレニズム・ローマのヴォールト組積、辻村はローマ時代の土木技術、深見はビザンティンから初期イスラームの建築計画というそれぞれの側面からセム系集団の建築術を評価した。
- (2) 2007年2月-3月、岡田が総括班の計画に基づくビシュリ山系の予備調査に参加。ラッカ市およびパルミラ市周辺の建築遺構のほか、比較の視点から建築組積を観察した。

5. 海外渡航などの主な活動

- (1) 2005年10月8－9日、金沢大学で第12回「ヘレニズム～イスラーム考古学研究会」。岡田、深見、辻村が研究成果発表。
- (2) 2005年12月27日－2006年1月8日、岡田、深見、新井によるレバノンの建築遺跡調査を実施。
- (3) 2006年1月13日－17日、パリでの国際記念物遺跡会議に岡田が委員として出席。
- (4) 2006年2月17日、日本建築学会東洋建築史小委員会主催の円卓会議。岡田が世話人、深見が研究報告。
- (5) 2006年5月22－24日、中国北京にて「日中共同シルクロード沿線文化財保護修復技術人員育成プログラム」で岡田が「土の文化遺産」について講義（別途資金による）。
- (6) 2006年7月23日－8月9日、岡田、深見、新井、辻村ほか研究協力者2名によるヨルダンの建築遺跡調査を実施。
- (7) 2006年10月19日－21日、国際記念物遺跡会議中国西安地域会議。岡田が講演（別途資金による）。
- (8) 2006年10月21日－22日、金沢大学で第13回「ヘレニズム～イスラーム考古学研究会」。岡田、深見、辻村が研究成果発表。
- (9) 2006年12月2日－7日、イランで「土の建築の保存と実務」の研修事業があり（ユネスコ日本信託基金による）、岡田が講義。
- (10) 2006年12月26日－29日、国際記念物遺跡会議ソウル地域会議。岡田が講演（別途資金による）。
- (11) 2007年2月27日-3月8日、総括班の計画に基づくビシュリ山系の予備調査に岡田参加。

6. それは「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか

本研究は、オリエント建築の歴史を組積造を主とした建築の形態と技術の系譜として捉え、比較の視点から、ユーフラテス中流域という地域に根差した特徴的な建築術の伝統の中に、技術伝承の枠組みとしての部族社会を見出そうとするものである。上記5－(2)(6)(11)など、これまでに調査が先行していたレバノン、ヨルダン地方は、同じセム系ながら、やや異なった部族集団の系譜を認めうる地域として、ビシュリ地域と、あるいは非セム系地域とも有力な比較対象となる。

今までのところ、とくにドームやヴォールトの架構に着目しており、これまでに、レヴァントからシリアの古代後期に、切石による球面ヴォールト加工の技術が著しく進歩し、つづくビザンティン文化やイスラームの建築に特有のドーム建築の隆盛に大きく貢献したことが明らかになってきた。

7. 今年度以降の計画

ビシュリ地域の考古学調査が本格化する今後は、当初から目指していた同地域の古代文明期の建築遺構を優先して調査対象とすると同時に、メソポタミアの北と東に隣接する地域をも視野に入れ、他研究計画班と連携しながら、フィールド調査を中心に研究費を活用したいと考えている。また、それらの成果を研究集会や出版物の形で公表、深化を図る予定である。

8. これまでの成果物

<出版物>

岡田保良

「ガダラのドームカル・ヴォールト」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』第12回（2005）pp. 60-64.
「古代西アジアにおける最初期の建築とその建材に関する一考察」『国士館考古』第2号（2006）pp. 79-86.

「続・ガダラのドーミカル・ヴォールト」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』第13回 (2006) pp. 99-102.

「古代西アジアにおける最初期の建築とその建材に関する一考察」『国士舘考古学』第2号 (2006) pp. 79-86.

「組積造の建築遺構を巡り歩くーレバノン篇」『Newsletter セム系部族社会の形成』第3号 (2006) pp. 9-14.

「西アジア古代後期のヴォールト組積について」『2007年度日本建築学会大会講演梗概集』(2007) (印刷中).

深見奈緒子

「ウマイヤ朝期の建築文化」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』第13回 (2006) pp. 103-107.

「アンジャールー初期イスラーム時代の宮殿都市への考察」『地中海学会月報』291 (2006) p. 8.

辻村純代

「ローマ都市の街路」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』第13回 pp. 8-10。

<口頭>

- 2006年12月3日： 岡田「Archaeological significance of Chogha Zanbil within the international context」および「Conservation of earthen cultural heritage」(いずれもイランでの「土の建築の保存と実務」研修事業講演として)。
- 2007年3月24日： 岡田「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」『セム系部族社会の形成ーユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究』第2回シンポジウム)。
- 2007年6月2日： 岡田「西アジア古代後期の石造ヴォールトについて」、深見「イスラーム初期の都市と建築」(いずれも古代オリエント博物館友の会講演会として)。

計画研究 オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系 セム系部族文化の基層構造と再編

宮下佐江子（古代オリエント博物館）

1. 研究組織

研究代表者：古代オリエント博物館 宮下佐江子

研究分担者：古代オリエント博物館 津村眞輝子

檀原考古学研究所 西藤 清秀

東京文化財研究所 勝木言一郎

2. 研究の目的

本研究は、紀元後 1-3 世紀のオアシス都市パルミラの基層構造であるセム系社会の文化が、地中海世界や東方文化と出会うことによってどのように変容したか、あるいは再編していったかを明らかにしようとするものである。

ビシュリ山系南西に位置するパルミラの歴史は古く、既に紀元前 1 8 世紀のマリ文書には「砂漠のタドモル」として記述されている。シリア砂漠の中であって、水資源の豊富なこの村は遊牧民や隊商に利用され続け、永くセム系社会の一員としてその歴史を育んできた。しかし、ヘレニズム以降、その様相は大きく転換する。町の名前は元来「タドモル」（本来の意味は不明）であったが、アレクサンドロスの東征に伴って移住してきたギリシア人によって「棗椰子のまち」を意味する「パルミラ」と呼ばれるようになった。やがて、シリアがローマ帝国の属州になると、東西交易の要衝の地として大いに栄え、それは 272 年にローマによって陥落されるまで続いたのである。列柱道、劇場、神殿などのローマ様式の建造物が多数残り、パルミラに特徴的な地下墓・家屋墓からは様々な文化の影響を受けた肖像彫刻や副葬品が多く出土している。

本研究はこのパルミラというオアシス都市を「セム系部族社会」が成立した数千年後の例として注目する。なかでも様々な文化が流入するローマ時代に軸足をおき、ローマ文化の影響が強いといわれるパルミラ文化のなかで、異文化の受容と伝統文化の変容がどのように行われ、セム系部族文化の痕跡はどのように残っているのかを具体的に探る。

3. 研究の方法

研究代表者および分担者はそれぞれの専門分野において各研究を実施し、パルミラの文化形成や社会の構造を多角的に研究するために、その成果を統合する。

研究代表者・宮下佐江子はパルミラの出土遺物の美術史的研究を担当する。当時のパルミラ社会には様々な民族が共生していたことは墓に残された名前の系統研究から知られるが、美術作品からも周辺諸文化の伝統や当時の最新流行を取り入れた例を見ることができる。分担者・西藤清秀は 1990 年からパルミラの墓の発掘を実施しており、考古学的立場からパルミラの葬制を研究する。分担者・津村眞輝子は周辺の同時代遺跡との比較研究を担当する。特にコインに焦点をあて、ローマ帝政期におけるパルミラおよびその周辺遺跡のコイン出土例の分析調査を進めている。分担者・勝木言一郎は東洋美術を専門とし、パルミラと東方との相互影響を探る。美術史的な要素のほか墓を「永遠の家」と呼んだパルミラの人々の来世観、楽園思想と中国における極楽観、浄土思想などとの比較研究を行う。

4. 2005-2006 年度の成果

宮下および西藤は現地シリア・パルミラの発掘調査を通して研究を進めた。宮下はパルミラ遺跡出土遺物の研究を通して、パルミラ文化の伝播と変容を追い、その広がりと各地域の独自性について考察した。西藤はパルミラの地下墓の形態や副葬品に主眼を置き、パルミラの葬制の変遷を追った。また現地の民族調査を実施することで、約 2000 年前のパルミラの伝統文化が現代社会に残存している例を見いだした。このように文化の伝統が数千年にわたって受け継がれていく例は、パルミラ最盛期の文化の中にも、それ以前の痕跡を見いだすことが可能であることを示唆している。津村および勝木は、現地シリアにおける調査は来年度以降とし、2005-2006 年度は文献および国内所蔵資料を中心に調査研究を実施した。

【直接的成果】

(出版刊行物)

西藤清秀 2005.5 「シリア・パルミラの地下墓にみる葬送観念」『日本考古学協会第 71 回総会研究発表要旨』日本考古学協会、296-299 頁。(Funeral conception of underground tomb in Palmyra, Syria, 71st Annual Meeting of Japanese Archaeological Association.)

宮下佐江子 2005.6 Des statuettes de musiciennes en terre cuie decouvertes en Syrie 『古代オリエント博物館 紀要 Bulletin of The Ancient Orient Museum』Vol.XXIV pp.1-16.

宮下佐江子 2005 「オアシス都市パルミラ - 日本隊の発掘」シルクロード学研究叢書 10 シルクロード学研究センター 19-30 頁 (PALMYRA Excavation of Japanese mission in Research Center for SILK ROADDOLOGY, pp.19-30)

Saito, Kiyohide 2005 DIE ARBEITEN DER JAPANISHEN MISSION IN DER SUDOST-NEKROPOLE. in Schmidt-Colinet, Andreas(Hrsg.), *Palmyra*. Philipp von Zabern Mainz, pp.32-35.

Saito, Kiyohide 2005 Palmyrene Burial Practices from Funerary Goods. Cussini, Eleonora(ed.), *Collected Essays to Remember Delbert R.Hillers*, Brill, Leiden. pp.150-165.

Saito, Kiyohide, 2005 New Discovery in Palmyra 2001 in *The International Conference on Zenobia & Palmyra 2002*, Al-Baath University, pp.131-143.

津村眞輝子 2005.8 「シリア出土のローマコイン」「シリア属州のコイン」『収集』8、9月号 (Roman Provincial Coinage in Syria. in *Shushu* vol.8, vol.9.)

勝木言一郎 2006.3 「日本における浄土図の変容と展開—法隆寺金堂壁画の図像を中心に—」『日本における外来美術の受容に関する研究 報告書』東京文化財研究所 169-174 頁。(Changes of iconography of Pure Land in Japan -Mural paintings of Horyuji Kondo. *Studies on the Reception of Imported Arts to Japan*. National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo. pp.169-174.)

勝木言一郎 2006.3 「古代日本における極楽イメージの変容」『日本における外来美術の受容に関する研究 報告書』東京文化財研究所. 201-210 頁。(Changes of images of Amitabha's Pure Land in Ancient Japan. *Studies on the Reception of Imported Arts to Japan*. National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo. pp.201-210.)

西藤清秀 2006.5 「パルミラの墓の形態に関する一考察」『日本考古学協会第 72 回総会発表要旨』284-287 頁、日本考古学協会。(An assumption on the typological transformation of tombs in Palmyra. in 72nd Annual Meeting of Japanese Archaeological Association.)

Yoshimura, K., T. Nakahashi, and K. Saito, 2006 Why did the ancient inhabitants of Palmyra suffer fluorosis? *Journal of Archaeology Science* 33, pp.1411-1418, Elsevier.

Saito, Kiyohide, K. Hamazaki, W. As'sad and T. Higuchi, 2006 From Excavation to Restoration and Reconstruction an the southeast necropolis in Palmyra, Syria. *World Archaeological Congress Inter Congress Inter-Congress:Osaka*, 2006-Abstract, p.157.

(口頭発表)

宮下佐江子 2005.10.8「イラク アル・タール出土綴れ織り」第12回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、金沢大学。(Textiles from al-Tal in Iraq. In *12th Annual Meeting of The Japan Society for Hellenistic-Islam Archaeological Studies*.)

宮下佐江子 2005.7.24「西アジアの装身具」シルクロード交流センター(奈良)(West Asian Accessory. *Research Center for SILK ROADOLGY*.)

【間接的成果】

(出版刊行物)

勝木言一郎 2006.2『初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土図の研究』創土社 1-515頁 (*Study on the iconography of Amitabha's Pure Land in DunHuang, from 7th Century until 8th Century, in Tang Dynasty, sodosha*, pp.1-515)

勝木言一郎 2006.3「ケルン東洋美術館蔵金剛童子」、『平成17年度 在外日本古美術品保存修復協力事業 修理報告書 絵画／工芸品』。東京文化財研究所。84-86頁。(Kongô Dôji (Kanikrodha), Museum of East Asian Art, Cologne. *The Restoration Report of the Cooperative Program for the Conservation of Japanese Art Objects Overseas*, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo. pp.84-86.)

宮下佐江子・津村眞輝子(編著) 2006.3『世界の金貨と銀貨』編著 古代オリエント博物館.(ed.)*Gold & Silver Coins of the World, Ancient Orient Museum Tokyo*)

勝木言一郎 2006.6『人面をもつ鳥—迦陵頻伽の世界』(『日本の美術』481) 至文堂 1-98頁。(Human-Headed Birds -Kalavinka, Japanese Art. No.481. Shibundo. pp.1-98.)

宮下佐江子・津村眞輝子(編著) 2006.9『シルクロード 華麗なる植物文様の世界』山川出版社 (*Botanical Design of Silk Road Yamakawa Shuppansha Ltd.*)

勝木言一郎 2007.3「ベルギー王立美術歴史博物館蔵涅槃図」、『平成18年度 在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書 絵画／工芸品』。東京文化財研究所。(Nehanzu (Nirvana Painting), Royal Museum of Art and History, Brussels. *The Restoration Report of the Cooperative Program for the Conservation of Japanese Art Objects Overseas*, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo.)

津村眞輝子 2007.3「サーサーン式銀貨につけられた「擦痕」は何か? : 新疆ウチャ出土一括コインのカウンターマークとの関係から見た新知見」『オリエント』第49巻第2号、日本オリエント学会。(What is the meaning of the score mark on the Sasanian and Arab-Sasanian silver coins from Wuqia in Xinjiang, northwest China. *Bulletin of The Society for Near Eastern Studies in Japan*. Vol.XXXXIX)

(口頭発表)

勝木言一郎 2006.3.29 「安西榆林窟における金剛童子の図像について」東京文化財研究所美術部研究会。(Iconography of Kongô Dôji (Kanikrodha) in Yulin Grottoes, AnXi. 2006.)

5. 「セム系部族社会の形成」研究への寄与

当研究班は「セム系部族社会」形成後を研究範囲とし、セム系部族社会が形成された後、その伝統を基盤とするオアシス都市パルミラが外来の文化をどのように受容したかを考察する。これは、セム系部族社会の

文化形成のその後の展開の一例を提起するものである。

6. 2007年度以降の計画

2007年度は研究班一同が現地にて、調査を行う。また、対象とする遺物・美術品を所蔵する国内外の博物館・美術館における調査も実施する。2005-2006年は各個人において研究を進めてきたが、2007年度以降はその成果の共有化を図り、共同で研究課題に取り組む予定である。

計画研究 西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究

松本 健 (国土舘大学イラク古代文化研究所)

I. 研究目的

- ・西アジアの考古遺跡のデータベースの作成。
文化遺産の保護と調査研究のために必要であり、特にイラクは緊急に求められる。
- ・遺跡のパターン化が出来るか、新たな遺跡を確認できるか、遺跡の立地条件を探る。

II. 研究方法

- ・考古遺跡の報告書などの文献からの確認。
- ・考古遺跡を衛星画像からの確認 (特にイラクは現在現地での調査は困難である)。
- ・現地イラク考古遺産庁からの情報入手。
- ・衛星画像から入手情報現地での確認。

III. 2005 ～ 2006 年度の研究経過と研究成果

- ・イラクにおける考古遺跡のデータベースの作成
考古遺跡 (現在 3 3 6 遺跡)
- ・シリア、ビシュリ山系の衛星画像などの資料入手
現地状況と衛星画像の照合
- ・イラクにおける資料の収集
キシュ、バビロン、南イラクなどの衛星画像の入手。分析はビシュリ山系の調査結果と合わせて分析を進める。南イラクの湿地地帯の復元に対する遺跡の再水没に伴う遺跡の緊急分布調査が求められる。

IV. Bishri 調査 (2007/03/07 - 2007/03/11) 松本健

3/7; Umm Qais-Irbit-Damas-

3/8; Damas-Der el Zor-ar Raqa-3/9Der el Zor-Dura Europos-Mari-Der el Zor-

3/10; Der el Zor-Bishri-ar Rasafu-al Monsura-al Kom-Palmyra-

3/11; Palmyra-Damas-Irbit-Umm Qais

(2007 年春の現地調査にて撮影した写真と、ユーフラテス流域の農作物栽培状況を衛星画像から読み取った例を以下に示す。)



写真1 Damas ～ Palmyra 間の風景



写真2 Palmyra ～ Der el Zor 間の風景



写真3 Euphrates (Der el Zor)



写真4 Der ez Zor ~ Raqa 間の風景



写真5 綿花の栽培



写真6 Zarabiye (台地の上)



写真7 遊牧(羊、ヤギ)



写真8 Bishri (保護区)



写真9 Bushri (遊牧区)

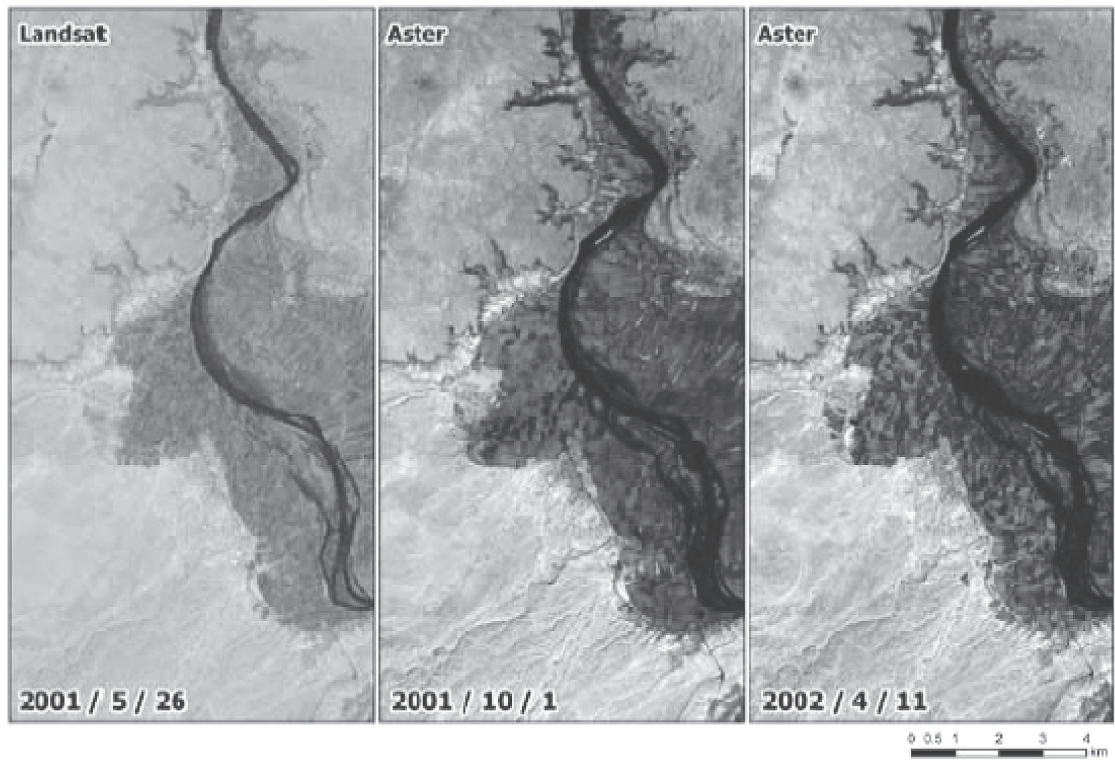


図1 ユーフラテス中流域：年間の栽培状況の変化状況

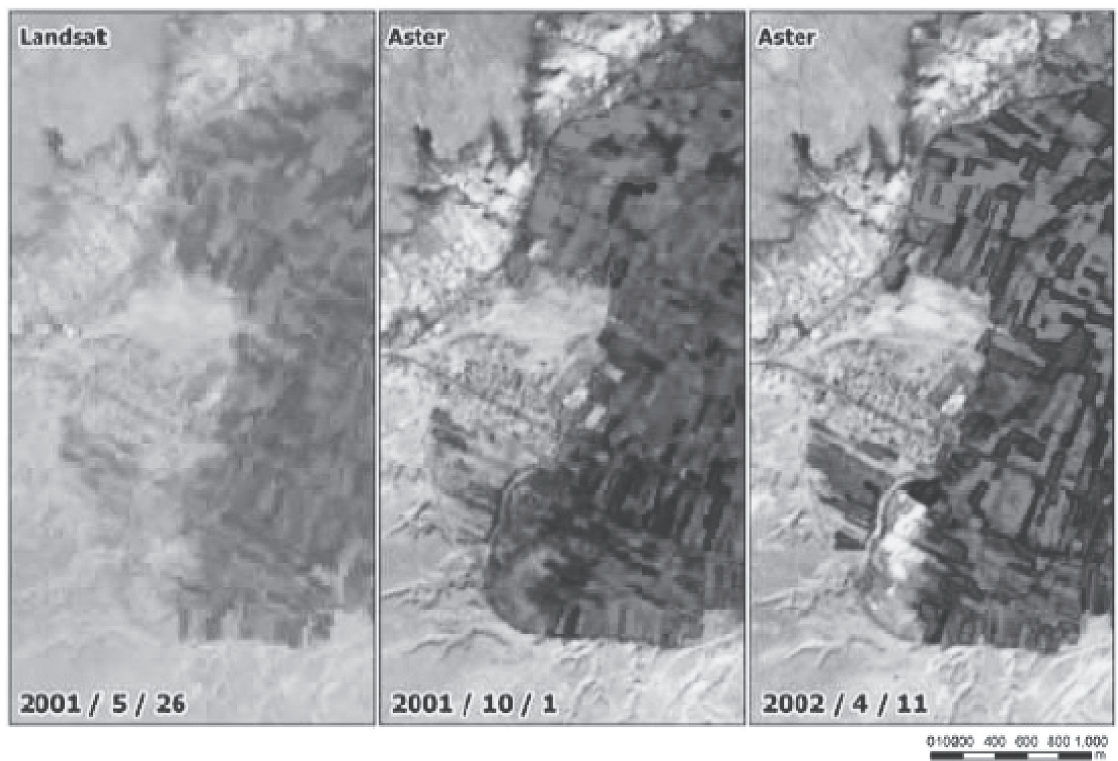


図2 ユーフラテス中流域：年間の栽培状況の変化状況（拡大）

V. 研究成果と問題点

ユーフラテス兩岸を踏査し、古代においてはユーフラテスが暴れ川で住民に恐れられていたのではないかと印象をうけた(ダム建設後は氾濫なし)。

ユーフラテスの河川敷は広く、肥沃であるにもかかわらず、全体に遺跡が少ないという印象を受けた。遺跡は台地近くの低地か、台地上にあるとの印象を受けた。

現在の耕地は遊牧民定住政策のもと年々拡大していると思われるが、主要作物は冬春は小麦、夏秋は綿花の栽培が多いようである(それらを衛星画像で分析すると明瞭である)。

今後の課題として、ユーフラテス河川時期の耕地面積を推定する。

耕地面積に対して小麦などの生産高を推定する(古代の文献や、現在の生産高を参考に)。

ビシュリ山系の現地調査および衛星画像による植生、遺跡分布などの分析を進める。

ユーフラテス中流域に果たしてメソポタミア大型遺跡は存在するのか、独立した都市はあったか。都市の立地条件を探る。

これらの分析結果を踏まえて他の地域においても比較研究をすすめる。

公募研究 北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究

高濱 秀 (金沢大学文学部)

現在の騎馬遊牧民の原型となったと考えられているのは、前1千年紀の初め頃に現れるユーラシア初期騎馬遊牧民である。セム系部族とは異なる形であり、また時代も数千年後のものであるが、彼らの文化を研究することは、セム系部族の遊牧民としての面を考える上に役立つであろう。具体的には、初期騎馬遊牧民文化の先駆的な文化と考えられるモンゴルの後期青銅器文化の遺跡を調査した。

モンゴル国、フブスグル県、オラーン・オーシグ I 遺跡は、ヘレクスルと呼ばれる一種の積石塚と、鹿石が共に見られる遺跡である。以前の調査から、ヘレクスルは墓と考えられ、これら両種の遺構には同じ馬犠牲の儀礼を伴うことが知られている。ほぼ同時代に同じ人々によって造られたものであろう。ここには 15 基ほどのヘレクスルがあるが、それは、家族あるいは一族など何らかの親縁関係にあった人々の墓と考えられよう。

2006 年度には 7 号鹿石付近を発掘した。その東側には 2 基の石堆があり、東を向いた馬の頭骨と頸骨が出土した。7 号鹿石の下には土壌が 3 基発見されたが、そのうちの 1 基が、おそらく元来鹿石の立てられていた穴と推定される。その穴によって壊された細長い長方形の石敷きも発見された。

7 号鹿石の南西側では、前年の発掘の結果、石の堆積の一部が見えており、また地表に多くの石が露出していた。今シーズンに拡張区を設定して調査した結果、そこで 9 基の石堆が発見された。そのうち 2 基を発掘して、東向きの馬の頭骨と頸骨などを発見した。以前 4 号鹿石の周囲で同様な馬の儀礼を伴うストーンサークルが発見されていたが、7 号鹿石の周囲には多くの石堆があったことが明らかになった。オラーン・オーシグ I の鹿石群の元来の形は、鹿石列に沿う形で、ストーンサークルや石堆が数多く营造されたものであったと考えられる。これはフヌイ川流域のジャルガラント遺跡にあるような大規模な石堆集合遺跡と通ずるものであろう。ユーラシア草原地帯において初期遊牧民文化が誕生する直前の時期に、このような儀礼を伴う遺構がモンゴルで形成されていたのは極めて興味深い。

2007 年度には、西アジアのセム系部族に関係する遺跡の調査に加わると共に、西アジアに現れた初期騎馬遊牧民であるスキタイに関連した遺跡・遺物を調査したいと考えている。

[本研究の直接的な成果を含む報告]

Takahama Shu, Hayashi Toshio, Kawamata Masanori, Matsubara Ryuji, D. Erdenebaatar (ed.)

Preliminary Report of the Archaeological Investigations in Ulaan Uushig I (Uushigiin Övör) in Mongolia.

Bulletin of Archaeology, the University of Kanazawa. Vol.28 (2006), pp.61-102

平成 18 年度

研究代表者	高濱 秀	金沢大学文学部	研究の総括
研究分担者	川又正智	国土舘大学文学部	セム系部族との比較
研究分担者	松原隆治	星城大学経営学部	鹿石付近の調査
研究分担者	塚本敏夫	元興寺文化財研究所	鹿石の三次元的計測

総括班 総合的研究手法による西アジア考古学

大沼克彦（国土舘大学イラク古代文化研究所）

1. 研究組織

研究代表者：大沼克彦（国土舘大学イラク古代文化研究所教授）

研究分担者：藤井純夫（金沢大学文学部教授）

西秋良宏（東京大学総合研究博物館教授）

常木 晃（筑波大学大学院人文社会科学研究科教授）

宮下佐江子（古代オリエント博物館研究部研究員）

佐藤宏之（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

2. 研究の目的

アッシリアやバビロンなど、西アジア古代王国の創建集団セム系民族の一大原郷とされるシリア国北東部ユーフラテス河中流域ビシュリ山系で総合調査をおこなう本領域研究は、自然、人文両科学の多彩な分野の融合的な連携を通して同地の自然と文化の変遷を解明し、そのうえで、同地の先史社会が定住社会を経て古代都市社会へ発展した経緯と、定住社会の出現とどのように関係しながらセム系部族社会が形成されたかを解明することを目的とする。

大学や研究機関などの邦人調査団が 1956 年以来西アジア地方でおこなってきた考古学研究は、客観的な研究方法により、世界的にも高い評価を受けてきた。

本研究は、この一連の邦人調査団の研究成果と個別性を踏まえつつも個別の枠にはとられない、総合的な研究として計画されている。

発掘調査を通して特定遺跡の歴史を再現する伝統的な考古学と異なり、本研究は遊牧部族社会の流入と離脱を不断に繰り返してきた西アジア都市の歴史的特性を、考古学、歴史学、文化史学に立脚して、通時的に解明することを目的とする。

総括班は以上の目的を達成するため、本領域全体の研究進行状況を統括し、調整する。また、研究成果を積極的に社会に還元する。したがって、全体会議、公開・非公開シンポジウム、研究発表会を定期的に開催し、ホーム・ページを頻繁に更新し、ニュース・レターと研究成果報告書を定期的に刊行する。さらに、進行過程にある研究の妥当性を検証するため、研究開始の 2 年後と研究の完遂後に外部評価を実施する。

3. 平成 17、18 年度の成果

本領域研究開始年にあたる平成 17 年度は、研究の本格化へ向けた全体方針と計画研究各々の方向性を再確認し、研究の成果を積極的に社会還元した。2 年次の平成 18 年度は、現地調査の大幅な遅れを取り戻すべく、シリア考古博物館庁と粘り強く交渉した。その結果、ビシュリ山系における遺跡分布調査の許可を 19 年の 2 月に獲得し、分布調査を成功裏に終了した。また、17 年度と同様に研究成果の社会還元尽力した。以下は、17、18 年度の活動の内訳である。

総括班会議・研究代表者会議：両年度とも、4 度にわたる総括班会議と研究代表者会議を開催した（平成 17 年度：17 年 7 月、10 月、12 月、平成 18 年 3 月；平成 18 年度：平成 18 年 7 月、10 月、12 月、平成 19 年 3 月）。この一連の会議を通して、研究の全体方針と計画研究各々の方向性を再確認した。

研究発表会：平成 17 年度には研究発表会を 2 度開催した。第 1 回（国内研究成果の発表）は平成 17 年 12 月 17 日（土）の午後 3 時半～5 時半に古代オリエント博物館会議室で開催した。話題提供者は前川和也「マルトゥーの結婚」、山田重郎「文書史料におけるセムの系譜とビシュリ山系」の 2 名である。第 2 回は平成 18 年 3 月 20 日（月）の午後 1 時～2 時半に古代オリエント博物館会議室で実施した。話題提供者は Giorgio Buccellati 教授（カリフォルニア大学コッツェン・メソポタミア考古学研究所所長）「The Discovery of a New Urban Civilization: Urkesh and the Hurrians」である。平成 18 度は 1 度の開催で、平成 18 年 10 月 22 日（日）の午後 3 時～4 時に、古代オリエント博物館会議室で、「比較言語学からみたセム語の起源」を池田潤が講演した。

ニュース・レター：平成 17 年度は 2 回の出版、平成 18 年度は 3 回の出版である。この一連の出版を通して研究成果や研究秘話を公表した。

ホームページ：平成 17 年の 9 月 14 日にホームページを開設し、平成 19 年 2 月 20 日の時点で 19 度更新した。同月には英語版も作成した。

公開シンポジウム：平成 17 年度は 1 回で、平成 18 年の 3 月 19 日（日）にサンシャインシティ文化会館 7 階会議室で実施した。このシンポジウム「ビシュリ山系：その研究史と研究の方向性」のプログラムは、「Prehistoric Research in Syria Today」（講演者：ダマスカス考古学博物館副館長・Heba Al-Sakhel 博士）、「The Mountain at the Core: The Geo-political Role of the Jebel Bishri in Early Historic Times」（講演者：カリフォルニア大学コッツェン・メソポタミア考古学研究所所長・教授 Giorgio Buccellati）、「石室墓と円筒墓：セム系部族社会の成立過程を墓制面から追跡する」（講演者：金沢大学文学部教授・藤井純夫）、「文書史料におけるセムの系譜とビシュリ山系」（講演者：筑波大学大学院人文社会科学研究所助教授・山田重郎）、「全体討論」（司会：総括班代表者・大沼克彦）である。平成 18 年度は 2 度開催した。平成 18 年 7 月 1 日（土）、2 日（日）の両日に開催した第 2 回シンポジウム「研究の現状と課題」、および、今回の平成 19 年 3 月 24 日（土）、25 日（日）両日の第 3 回シンポジウム「平成 17～18 年度の研究成果」の 2 つである。ともに、総括班と計画研究班すべての代表者による研究の現状報告と研究方針を内容とする。

専門的知識の教授：国内外の研究機関・個人との渉外活動を積極的におこない、専門的知識を享受するため、当該研究分野の第 1 線で活躍する外国人研究者を、平成 17 年度に 2 名、平成 18 年度に 4 名招聘した。平成 17 年度の招聘はカリフォルニア大学コッツェン・メソポタミア考古学研究所所長 Giorgio Buccellati 教授（平成 18 年 3 月 16 日～21 日：東京滞在）、および、ダマスカス考古学博物館副館長 Heba Al-Sakhel 博士（平成 18 年 3 月 17 日～22 日：日東京滞在）である。それぞれ、「The Mountain at the Core: The Geo-political Role of the Jebel Bishri in Early Historic Times」、「Prehistoric Research in Syria Today」という題目で、当該研究領域の専門的知識を提供した。平成 18 年度には、シリア共和国考古博物館庁長官 Bassam Jamous、同庁調査局長 Michel Al-Maqdissi、同庁 Samer Abdel Ghafour の 3 氏、および、ミュンヘン大学考古学研究所教授 Michael Roaf 氏の 4 名を招聘した。Jamous、Al-Maqdissi、Ghafour の 3 氏の来日は平成 18 年 11 月 7 日から 12 日までで、この間、筑波大学（10 日）と古代オリエント博物館（11 日）で、「シリアにおける考古学調査の現状」という題目のもと、シリアにおける考古学研究の現状の最新情報を提供した。Roaf 氏の来日は今回の平成 19 年 3 月 21 日から 26 日である。同氏からは、ラッカ市周辺の前期青銅器時代に関する情報を享受する。

研究成果報告書：平成 17 年度には各計画研究班の研究成果をとりまとめ、平成 18 年 3 月 31 日に、「特定領域研究「セム系部族社会の形成」平成 17 年度研究報告」として出版した。

現地調査の打ち合わせ：現地調査の事前打ち合わせのため、総括班代表者の大沼が平成 17 年度にシリア考古博物館庁を 2 度にわたり訪問した（平成 17 年 9 月 18 日～25 日、平成 18 年 2 月 26 日～3 月 3 日）。

18年度は、大沼が7月15日から21日にかけてシリア考古博物館庁を訪問し、現地調査の開始に向けた具体的な打ち合わせをおこなった。

現地調査の開始：大幅に遅れていたビシュリ山系の遺跡分布調査の許可をようやく平成19年2月15日に獲得した。同日から3月10日まで実施した第1次現地調査はラッカ市とビシュリ山北端のあいだの台地で実施されたが、この調査により、ユーフラテス河段丘上のビシュリ台地では東側に青銅器時代の小規模遺跡が若干存在し、西側にローマ、ビザンツ、イスラム時代の遺跡が多いという、地域による遺跡年代の偏りのあることが確認された。いずれにせよ、現在、遺跡分布調査の開始、作業報告書の提出、特定遺跡発掘の許可申請という公式事務手続きが進行中であり、大幅に遅れてきた本研究は急速に進展しつつある状況である。

4. 「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するのか

総合調査を通して「セム系部族社会の形成」経緯を解明することをめざす本領域研究は、自然、人文両科学の多彩な分野の融合的な連携を必要不可欠とする。

したがって、総括班の役割は、多彩な研究分野の融合的な連携を推進するために、全体会議、研究発表会、公開・非公開シンポジウムを定期的開催し、すべての計画研究の進行状況を把握して相互調整をおこない、研究の成果をニューズレター、報告書、ホームページなどを通して積極的に社会に還元することにある。国内外の関連研究機関者との連絡・渉外、そして、本研究の妥当性を検証するための外部評価の実施も総括班の役割である。

5. 今後の計画

本領域研究は「個別的成果は多いが総合的研究がおこなわれてこなかった当該領域の研究水準を高める研究（平成17年度申請時の審査結果の審査に係る意見より抜粋）」としてその成果が大いに期待されている。

しかしながら、諸般の事情により現地調査の開始が大幅に遅れてきたため、当初の5カ年計画、1) 遺跡の分布調査を実施する（第1年次）。この分布調査によって遺跡の年代と分布状況が明らかになる。2) 分布調査の成果に基づいて、研究課題の各々に適った遺跡を選択し、発掘調査を実施する（第2～4年次）。3) 最終年度には発掘調査の成果を踏まえた総括的な研究と補足的な調査を現地で実施する（第5年次）は変更を余儀なくされている。

しかし現在、第1次遺跡分布調査を成功裏に終了し、特定遺跡の発掘調査の開始も直前である。したがって、調査の遅れは取り戻されつつある。

今後は、可能な限り早急に遺跡の発掘調査を開始して4年次まで継続し、第5年次の計画である総括的な研究と補足的現地調査を当初の計画通り実施する。

総括班はこれらの現地調査を統括し、調査に参加する各研究班のスケジュール調整をおこなうことになる。

科学研究費補助金 「セム系部族社会の形成」第3回シンポジウム **平成17～18年度の研究成果**

2007年7月24日

発行： 文部科学省科学研究費補助金平成17年度発足「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
総括班：大沼克彦（代表）、藤井純夫、西秋良宏、常木 晃、宮下佐江子、佐藤宏之
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1 国士舘大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 Email：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html
